

常磐自動車道遺跡調査報告45

うわだいら

上平 A 遺跡 (3次調査)

うわだいら

上平 B 遺跡 (2次調査)

どうだいら

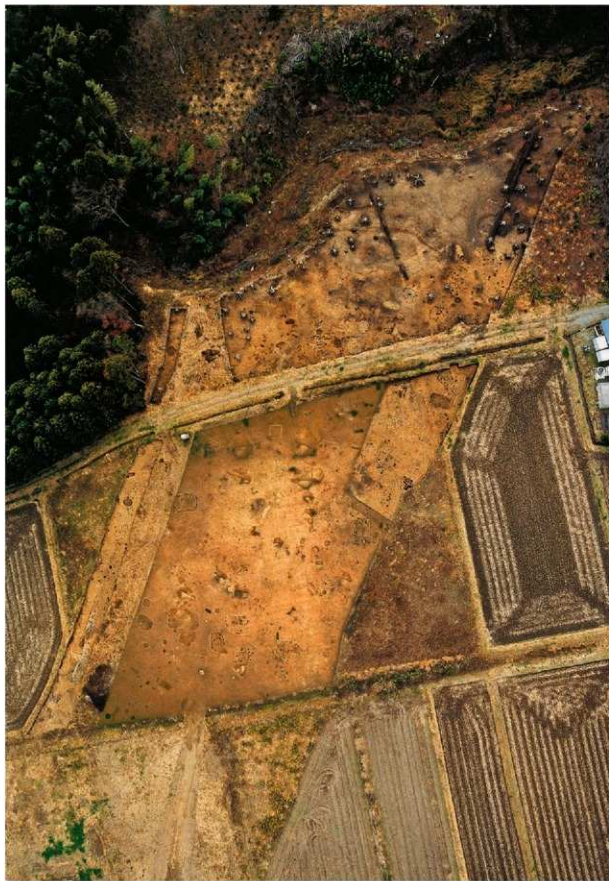
道平 遺跡 (2・3次調査)

かみはぎだいら

上萩平 D 遺跡

はっほうだいら

八房平 B 遺跡



口絵 上平A遺跡遠景（北上空から。平成14・16年度調査区合成）

序 文

福島県浜通り地方を縦貫する常磐自動車道は、昭和63年に埼玉県三郷～いわき中央間、平成11年にいわき中央～いわき四倉間、平成14年にはいわき四倉～広野間、平成16年には広野～常磐富岡間が開通し、現在は富岡～相馬間で工事が進められています。

この常磐自動車道建設用地内には、先人が残した貴重な文化遺産が所在しており、周知の埋蔵文化財包蔵地を含め、数多くの遺跡等を確認しております。

埋蔵文化財は、それぞれの地域の歴史と文化に根ざした歴史的遺産であると同時に、我が国の歴史・文化等の正しい理解と、将来の文化の向上発展の基礎をなすものです。

福島県教育委員会では、常磐自動車道建設予定地内で確認されたこれらの埋蔵文化財の保護・保存について、開発関係機関と協議を重ね、平成5年度以降、埋蔵文化財包蔵地の範囲や性格を確かめるための試掘調査を行い、その結果をもとに、平成6年度から、現状保存が困難な遺跡については記録として保存することとし、発掘調査を実施してきました。

本報告書は、平成16・17年度に行った双葉郡大熊町の道平遺跡、平成17年度に行った上平A遺跡・上平B遺跡及び双葉町の上萩平D遺跡・八房平B遺跡の発掘調査の調査成果をまとめたものであります。この報告書を県民の皆様が、文化財に対する御理解を深め、地域の歴史を解明するための基礎資料として、さらには生涯学習等の資料として広く活用していただければ幸いに存じます。

最後に、発掘調査から報告書の作成にあたり、御協力いただいた東日本高速道路株式会社、財団法人福島県文化振興事業団をはじめとする関係機関並びに関係各位に対し、感謝の意を表するものであります。

平成18年11月

福島県教育委員会
教育長 富田孝志

あいさつ

財団法人福島県文化振興事業団では、福島県教育委員会からの委託により、県内の大規模な開発に伴う埋蔵文化財の調査業務を行っております。常磐自動車道建設にかかる遺跡の調査は、平成6年度に、いわき市四倉町に所在する遺跡の調査を開始し、平成13年度をもって富岡IC予定地までの発掘調査を終了しております。

また、平成14年度からは富岡ICから相馬IC予定区間にかかる遺跡調査に着手いたしました。これまでに調査を行った遺跡は、いわき市四倉町・広野町・楡葉町・富岡町・大熊町・双葉町・浪江町・南相馬市の55遺跡になります。

本報告書は、平成17年度に実施した発掘調査のうち、大熊町に所在する上平A遺跡（3次調査）・上平B遺跡（2次調査）・道平遺跡（3次調査）、双葉町に所在する上萩平D遺跡・八房平B遺跡の調査成果と、平成16年度に実施した発掘調査の道平遺跡（2次調査）の調査成果をまとめたものです。

上平A遺跡からは、縄文時代前期前葉・後期の土器や、前期前葉・後期前葉の堅穴住居跡などが発見されています。上平B遺跡・道平遺跡からは、縄文時代後期の貯蔵用の穴、土器と石器などが発見されています。上萩平D遺跡からは縄文時代の落し穴状土坑など、八房平B遺跡からは中世の木炭窯跡が発見されました。

今後、これらの調査成果を考古学や歴史学など研究の基礎資料として、さらに地域社会の理解や生涯学習に幅広く活用していただければ幸いです。

おわりに、この調査に御協力いただきました東日本高速道路株式会社東北支社いわき工事事務所、福島県担当部局、大熊町・双葉町並びに地域住民の皆様には、深く感謝申し上げますとともに、埋蔵文化財の保護に対し、今後とも一層の御理解と御協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成18年11月

財団法人 福島県文化振興事業団
理事長 高城 俊 春

緒 言

- 1 本書は、平成17年度に実施した常磐自動車道（いわき工区）遺跡調査の発掘調査報告である。
- 2 本書には、平成17年度に実施した常磐自動車道（いわき工区）遺跡調査のうち、双葉郡大熊町に所在する上平A遺跡（3次調査）・上平B遺跡・道平遺跡（3次調査）、双葉町に所在する上萩平D遺跡・八房平B遺跡、併せて平成16年度に実施した道平遺跡（2次調査）の調査成果を取録した。
- 3 本事業は、福島県教育委員会が東日本高速道路株式会社の委託を受けて実施し、調査にかかる費用は東日本高速道路株式会社が負担した。
- 4 福島県教育委員会では、発掘調査を財団法人福島県文化振興事業団に委託して実施した。
- 5 財団法人福島県文化振興事業団では、遺跡調査部の次の職員を配した。
平成16年度配置職員：専門文化財主査 松本 茂 文化財副主査 阿部 知己
文化財主事 坂田由紀子
平成17年度配置職員：文化財副主査 阿部 知己 嘱 託 高林 真人
- 6 本書の執筆にあたっては、調査を担当した調査員が分担して行い、文責は章・節末または文末に示した。序章第1節については、文化財主査吉野滋夫が執筆した。
- 7 付章に掲載した自然科学分析は、次の機関に依頼した。

炭化材の年代測定	株式会社加速器分析研究所
樹種同定	株式会社古環境研究所
- 8 本書に掲載した地図は、平成18年度に国土地理院長の承認を得て、同院発行の2.5万分の1及び5万分の1地形図を複製使用したものである。「(承認番号) 平18東複第87号」
- 9 引用・参考文献は執筆者の敬称を省略し、各編ごとにまとめて掲載した。
- 10 本書に収録した遺跡の調査記録及び出土資料は、福島県教育委員会が保管している。
- 11 発掘調査から本報告書を作成するまでに、次の機関からご指導・御助言をいただいた。
大熊町教育委員会 大熊町文化センター 双葉町教育委員会

用 例

- 1 本書の遺構実測図の用例は、次の通りである。
- (1) 座 標 値 上平A遺跡の座標値は、1次調査を踏襲して日本国土座標第Ⅸ系で設定した。その他の4遺跡の座標値は、世界測地系で設定した。
 - (2) 方 位 図中の方位は上平A遺跡では真北、その他の4遺跡では座標北を示す。表記がない遺構図は、全て図の真上を真北または座標北とする
 - (3) 縮 尺 率 挿図のスケールは右脇のカッコ内に示す。竪穴住居跡は1/40、木炭窯跡・土坑・集石遺構・土器埋設遺構は1/30で採録した。
 - (4) ケ バ 遺構内の傾斜部は III の記号で、相対的に緩傾斜の部分は ∇ で表現した。また、後世の人為的な盛土や削土の傾斜部は ∇ の記号で表現した。
 - (5) 土 層 遺構外堆積土はローマ数字で I・II…、遺構内堆積土は算用数字で ℓ 1・2とした。土色については、『新版標準土色帖 22版』（小山正忠・竹原秀雄編著1999日本色研事業株式会社発行）を基準とした。
 - (6) 線 種 実線は上端・下端・攪乱範囲・調査区域。破線は推定線・挟り込み線を示す。その他の場合は、用例を挿図中に示した。
 - (7) 標 高 東京湾平均海面からの海拔高度を示す。
 - (8) 網 点 遺構に関する網点等の用例は、挿図中に示した。
 - (9) ビットの深さ ビット番号脇の () 内には検出面からの深さ (cm) を示す。
- 2 本書における遺物実測図等の用例は、次のとおりである。
- (1) 縮 尺 率 挿図のスケール右脇に表示した。原則的には、土器・土製品を1/2・1/3縮尺、石器を1/2、拓本を2/5または1/3で採録した。挿図中に、2個以上スケールがある時は、スケール右下に対象となる遺物の番号を示した。
 - (2) 遺物番号 遺物は挿図ごとに通し番号を付した。文中における遺物番号は、例えば、図1の2番の遺物を「図1-2」とし、挿図中では「1図2」とし、写真図版中では「1-2」と表示した。
 - (3) 遺物註記 出土グリッド、出土層位は遺物番号の右脇に表示した。上平A遺跡・上平B遺跡での遺物の取り上げの時には、10mグリッドを5m方眼に4分割した。この方眼は、北西から時計回りに「1-4」と番号を付した。出土グリッドの表示は、例えば、D8グリッドの4番目の方眼から出土した場合、「D8-4」と表示した。
 - (4) 計 測 値 計測値・石質は各実測図脇に表示した。() 内の数値は推定値、[] 内の数値は遺存値を示す。
 - (5) 遺物断面 粘土積上痕は一点鎖線で表記した。胎土に植物繊維を混和する土器は、断面に▲で示した。
 - (6) 網 点 遺物に関する網点等の用例は各挿図に示した。
- 3 本文中で使用した略号は次の通りである。
- | | | |
|------------------------|------------|----------------|
| 大熊町-O K | 双葉町-F B | 上平A遺跡-U D・A |
| 上平B遺跡-U D・B | 道平遺跡-D D R | 上萩平D遺跡-K H D・D |
| 八房平B遺跡-H P D・B | グリッド-G | 遺構外堆積土-L |
| 遺構内および遺物包含層堆積土- ℓ | 竪穴住居跡-S I | 土 坑-S K |
| 集石遺構-S S | 土器埋設遺構-S M | 小 穴-PまたはG P |

目 次

序 章

第1節 調査の経緯	1
第2節 遺跡の位置と自然環境	3
第3節 歴史的環境	6
第4節 調査の方法	12
第5節 縄文土器の分類	14

第1編 上平A遺跡(3次調査)

第1章 調査経過	19		
第2章 遺構と遺物	23		
第1節 遺構の分布と基本土層	23		
第2節 竪穴住居跡	27		
29号住居跡(27)	32号住居跡(28)	33号住居跡(28)	35号住居跡(32)
36号住居跡(32)			
第3節 土 坑	36		
53号土坑(36)	54号土坑(37)	55号土坑(37)	56号土坑(37)
57号土坑(39)	58号土坑(39)	59号土坑(39)	61号土坑(40)
62号土坑(40)	63号土坑(40)	64号土坑(41)	65号土坑(41)
67号土坑(42)	68号土坑(42)	69号土坑(42)	70号土坑(45)
72号土坑(45)	73号土坑(45)	74号土坑(46)	75号土坑(46)
76号土坑(46)	77号土坑(49)	78号土坑(49)	79号土坑(49)
80号土坑(51)	81号土坑(51)	82号土坑(51)	83号土坑(53)
84号土坑(53)	85号土坑(53)	86号土坑(55)	87号土坑(55)
88号土坑(55)	89号土坑(56)	90号土坑(56)	91号土坑(56)
92号土坑(58)	93号土坑(58)	94号土坑(58)	95号土坑(60)
96号土坑(60)	97号土坑(60)	98号土坑(60)	99号土坑(62)
100号土坑(62)	101号土坑(62)	102号土坑(63)	103号土坑(65)
第4節 木炭窯跡	66		
2・3号木炭窯跡(66)			
第5節 遺物包含層	67		
遺物の出土状態(69)	遺物(70)		

第2編 上平B遺跡(2次調査)

第1章 調査経過	93
第2章 遺構と遺物	94
第1節 遺構の分布と基本土層	94
第2節 土 坑	96
23号土坑(96) 24号土坑(97) 25号土坑(97)	
第3節 遺物包含層	99
遺物の出土状態(99) 遺物(100)	

第3編 道平遺跡(2次調査)

第1章 調査経過	111
第2章 遺構と遺物	113
第1節 遺構の分布と基本土層	113
第2節 竪穴住居跡	118
1号住居跡(118) 2号住居跡(118) 3号住居跡(120) 4号住居跡(123)	
5号住居跡(123)	
第3節 土 坑	126
5号土坑(127) 6号土坑(127) 7号土坑(127) 8号土坑(127)	
9号土坑(129) 10号土坑(129) 11号土坑(129) 12号土坑(129)	
13号土坑(131) 14号土坑(131) 15号土坑(131) 16号土坑(133)	
17号土坑(133) 18号土坑(133) 19号土坑(133) 20号土坑(135)	
21号土坑(135) 22号土坑(135) 23号土坑(135) 24号土坑(136)	
25号土坑(136) 26号土坑(136)	
第4節 集石遺構	139
1号集石遺構(139)	
第5節 土器埋設遺構	140
1号土器埋設遺構(140)	
第6節 遺物包含層	140
遺物の出土状態(140) 遺物(141)	

第4編 道平遺跡(3次調査)

第1章 調査経過	159
第2章 遺構と遺物	161
第1節 遺構の分布と基本土層	161

第2節	堅穴住居跡	165
	6号住居跡(165)	
第3節	土坑	168
	27号土坑(168)	28号土坑(168)
	29号土坑(168)	30号土坑(169)
	31号土坑(169)	32号土坑(169)
	33号土坑(172)	34号土坑(172)
	35号土坑(172)	
第4節	遺物包含層	173
	遺物の出土状態(173)	遺物(174)
第3章	ま と め	175

第5編 上萩平D遺跡

第1章	調査経過	191
第2章	遺構と遺物	192
第1節	遺構の分布と基本土層	192
第2節	土坑	194
	1号土坑(194)	2号土坑(194)
	3号土坑(194)	4号土坑(195)
	5号土坑(195)	6号土坑(197)
	7号土坑(197)	8号土坑(197)
	9号土坑(197)	10号土坑(199)
	11号土坑(199)	
第3章	ま と め	200

第6編 八房平B遺跡

第1章	調査経過	207
第2章	遺構と遺物	207
第1節	遺構の分布と基本土層	207
第2節	木炭窯跡	209
	1号木炭窯跡(209)	
第3節	道跡	211
	1～4号道跡(211)	
第3章	ま と め	212

付編1	福島県双葉郡大熊町上平A遺跡、双葉町上萩平D遺跡・八房平B遺跡出土炭化材の放射性炭素年代測定結果	215
付編2	福島県双葉郡大熊町上平A遺跡、双葉町上萩平D遺跡・八房平B遺跡出土炭化材の樹種同定結果	217

挿図・表・写真目次

【口 絵】

上平A遺跡遠景
(北上空から。平成14・16・17年度調査区合成)

序 章

【挿 図】

図1 常磐自動車道位置図	1	図4 遺跡周辺の環境(2)	7
図2 遺跡周辺の環境(1)	4	図5 周辺の遺跡(1)	9
図3 上平A・上平B・道平遺跡間の地形断面図	5	図6 周辺の遺跡(2)	11

第1編 上平A遺跡(3次調査)

【挿 図】

図1 上平A・上平B遺跡調査区位置図	20	図18 72・74・75号土坑	48
図2 グリッド配置図(1)	21	図19 76～79号土坑	50
図3 グリッド配置図(2)	22	図20 80～82・87号土坑	52
図4 遺構配置図(1)	24	図21 83～85号土坑	54
図5 遺構配置図(2)	25	図22 86・88～90号土坑	57
図6 基本土層	26	図23 91～95号土坑	59
図7 29・32号住居跡、出土遺物	29	図24 96～100号土坑	61
図8 33号住居跡	30	図25 101～103号土坑	63
図9 33号住居跡出土遺物	31	図26 土坑出土遺物(1)	64
図10 35号住居跡	33	図27 土坑出土遺物(2)	65
図11 35号住居跡出土遺物	34	図28 2・3号木炭竈跡	66
図12 36号住居跡	35	図29 グリッド別別土器出土点数(1)	68
図13 36号住居跡、出土遺物	36	図30 グリッド別別土器出土点数(2)	69
図14 53～56号土坑	38	図31 遺物包含層出土遺物(1)	71
図15 57～59・62・64号土坑	43	図32 遺物包含層出土遺物(2)	72
図16 61・63・67・68号土坑	44	図33 遺物包含層出土遺物(3)	73
図17 65・69・70・73号土坑	47	図34 遺物包含層出土遺物(4)	74

【写 真】

1 調査区全景(1)	75	9 53～59・62号土坑	83
2 調査区全景(2)	76	10 61・63～65・67～69号土坑	84
3 調査区全景(3)、基本土層	77	11 70・72～79号土坑	85
4 調査区全景(4)	78	12 80～85・87号土坑	86
5 29・32号住居跡	79	13 86・88～91号土坑	87
6 33号住居跡	80	14 92～96・98号土坑	88
7 35・36号住居跡	81	15 97・99～103号土坑	89
8 35・36号住居跡、土坑群	82	16 出土遺物	90

第2編 上平B遺跡(2次調査)

【挿 図】

図1 グリッド配置図	93	図5 グリッド別別土器出土点数	99
図2 遺構配置図	95	図6 遺物包含層出土遺物(1)	101
図3 基本土層	96	図7 遺物包含層出土遺物(2)	102
図4 23～25号土坑、出土遺物	98	図8 遺物包含層出土遺物(3)	103

【写真】

1 遺跡遠景	105
2 調査区全景	106

第3編 道平遺跡（2次調査）

【挿図】

図1 道平遺跡調査区位置図	111
図2 調査区位置図, グリッド配置図	112
図3 遺構配置図(1)	114
図4 遺構配置図(2), 基本土層	115
図5 基本土層	116
図6 1号住居跡, 出土遺物	119
図7 2号住居跡	120
図8 3号住居跡, 出土遺物	122
図9 4号住居跡	124
図10 5号住居跡, 出土遺物	125
図11 5号住居跡出土遺物	126
図12 5~8号土坑	128

【写真】

1 調査区全景(1)	147
2 調査区全景(2), 基本土層	148
3 1・4号住居跡	149
4 2・3号住居跡	150
5 3・5号住居跡	151

第4編 道平遺跡（3次調査）

【挿図】

図1 調査区位置図, グリッド配置図	160
図2 遺構配置図(1)	162
図3 遺構配置図(2)	163
図4 基本土層	164
図5 6号住居跡	166
図6 6号住居跡, 出土遺物	167
図7 27~31号土坑	170

【写真】

1 調査区全景(1)	183
2 調査区全景(2)	184
3 調査区全景(3), 基本土層	185

【表】

表1 上平A・上平B・道平遺跡出土 遺構・遺物編年表	179
-------------------------------	-----

第5編 上萩平D遺跡

【挿図】

図1 上萩平D遺跡調査区位置図	191
図2 グリッド配置図	192
図3 遺構配置図, 基本土層	193

【写真】

1 調査区全景(1)	201
2 調査区全景(2), 基本土層	202

3 基本土層, 23~25号土坑	107
4 出土遺物	108

図13 9~12号土坑	130
図14 13~16号土坑	132
図15 17~20号土坑	134
図16 21~26号土坑	137
図17 土坑出土遺物	138
図18 1号集石遺構, 出土遺物	139
図19 1号土器埋設遺構, 出土遺物	140
図20 グリッド別土器出土点数	141
図21 遺物包含層出土遺物(1)	142
図22 遺物包含層出土遺物(2)	143
図23 遺物包含層出土遺物(3)	144
図24 遺物包含層出土遺物(4)	145

6 5号住居跡, 1号土器埋設遺構, 5・8・11号土坑	152
7 6・7・9・10・12~15号土坑	153
8 16~21・23号土坑	154
9 21~26号土坑, 1号集石遺構	155
10 出土遺物	156

図8 32~35号土坑	171
図9 土坑出土遺物	172
図10 グリッド別土器出土点数	173
図11 遺物包含層出土遺物	174
図12 上平A・上平B・道平遺跡 時代別遺構配置図	180

4 6号住居跡	186
5 27~31・33号土坑	187
6 32・34・35号土坑	188
7 出土遺物	188

図4 1~5号土坑	196
図5 6~10号土坑	198
図6 11号土坑	199

3 1~5・7号土坑	203
4 6・8~11号土坑	204

第6編 八房平B遺跡

【挿 図】

図1	グリッド配置図	207
図2	遺構配置図, 基本土層	208
図3	1号木炭窯跡	210

【付編1 表】

表1	上平A遺跡・上萩平D遺跡・八房平 B遺跡出土炭化材の放射性炭素年代 測定結果	215
----	--	-----

【付編2 表】

表1	上平A遺跡・上萩平D遺跡・八房平 B遺跡における樹種同定結果	219
----	-----------------------------------	-----

【写 真】

1	調査区全景	213
2	基本土層, 1号木炭窯跡	214

【付編2 写真】

写真1	上平A遺跡・八房平B遺跡出土炭 化材	219
-----	-----------------------	-----

序 章

第1節 調査の経緯

1 平成16年度までの調査経過

常磐自動車道は、埼玉県三郷市を起点として、千葉県・茨城県・福島県浜通り地方を縦貫し宮城県に至る、太平洋沿岸の交通の大動脈として計画された路線である。この計画の内、三郷インターチェンジ（以下ICと略す）からいわき市のいわき中央ICまでは、昭和63年に供用が開始され、更に、いわき中央ICからいわき四倉ICまでは平成11年3月に供用を開始している。

これら供用が開始された区間内、茨城県境からいわき中央ICまでの間に所在する4遺跡に関しては、昭和59・60年に、いわき市教育委員会が財団法人いわき市教育文化事業団に委託し、発掘調査を実施した。いわき中央IC～いわき四倉IC間に所布する20遺跡の発掘調査は、平成6年度から9年度にかけ好間～平赤井・平窪地区の10遺跡の発掘調査をいわき市教育委員会が財団法人いわき市教育文化事業団に、四倉町大野地区の10遺跡の発掘調査は福島県教育委員会が財団法人福島県文化センターにそれぞれ委託して実施された。

いわき四倉IC以北の路線については、平成3年にいわき四倉IC～富岡IC間が整備計画路線に格上げされ、平成5年には施工命令がだされた。更に、富岡IC以北については、平成8年に相馬ICまでの区間が整備計画路線となり、平成10年に施工命令がだされた。

福島県教育委員会では、いわき四倉IC以北の路線内に所在する埋蔵文化財に関して、平成6年度より表面調査を実施し、平成10年度までに宮城県境まで終了している。この成果を受けて、平成

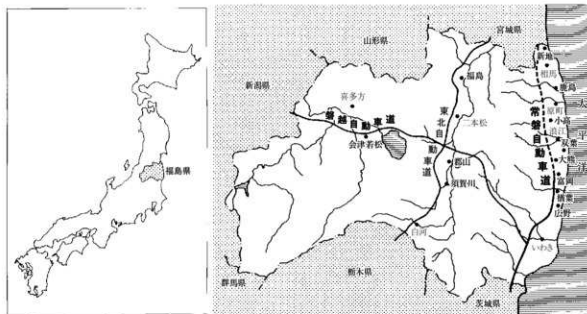


図1 常磐自動車道位置図

7年度よりいわき四倉IC～富岡IC間の試掘調査を実施した。

平成9年度からは、同区間に所在する遺跡の発掘調査が開始された。平成9年度はいわき市内の5遺跡と広野町内の1遺跡の発掘調査を実施し、平成10年度はいわき市内の4遺跡、広野町内の3遺跡、橋葉町内の3遺跡、富岡町内の2遺跡の発掘調査を実施した。この平成10年度の調査により、路線内に所在する遺跡の内、いわき市内に所在する遺跡の発掘調査を全て終了した。平成11年度は、広野町内の4遺跡、橋葉町内の5遺跡について調査を実施した。平成12年度は、広野町内の1遺跡、橋葉町内の7遺跡、富岡町内の5遺跡について調査を実施した。この平成12年度の調査により、路線内に所在する遺跡の内、広野町内に所在する遺跡の発掘調査を全て終了した。平成13年度は、橋葉町の1遺跡、富岡町内の5遺跡について実施した。平成13年度の調査では、路線内に所在する遺跡の内、橋葉町内に所在する遺跡が橋葉パーキングエリア2期線部分に残された大谷上ノ原遺跡を残して終了した。平成14年度は、富岡町の1遺跡、大熊町の2遺跡について実施した。当初富岡ICまでについては日本道路公団東北支社いわき工事事務所、富岡ICから大熊町以北については相馬工事事務所がそれぞれ管轄していたが、7月1日付けをもって富岡ICから浪江ICまでの区間についても、いわき工事事務所が管轄することとなった。平成15年度は相馬市の2遺跡、浪江町の2遺跡について調査を実施した。平成16年度は大熊町の3遺跡、鹿島町の2遺跡、相馬市の1遺跡について調査を実施した。

2 平成17年度の調査経過

平成17年度の常磐自動車道いわき工区の発掘調査は、福島県教育委員会の委託を受け、調査員4名を配置して実施した。発掘調査の対象とした遺跡は大熊町に所在する上平A遺跡・上平B遺跡・道平遺跡の3遺跡、双葉町に所在する上萩平D遺跡・八房平B遺跡の2遺跡、浪江町に所在する太刀洗遺跡・乱塔前遺跡の2遺跡、調査面積は総計13,420㎡である。

各遺跡の発掘調査は東日本高速道路株式会社東北支社いわき工事事務所（以下、いわき工事事務所と略す）との協議に基づき実施した。大熊町・浪江町ともに調査員各2名を配置した。大熊町では上平A遺跡の調査に着手し、上平B遺跡・道平遺跡については、条件整備の状況により、調査に着手することとした。そのために、調査期間の中断が余儀なくされた。

双葉町では、上萩平D遺跡・八房平B遺跡が4・5月に実施された試掘調査の結果によって、発掘調査を実施することとなった。このため、大熊町に配置されていた調査員2名は、上萩平D遺跡・八房平B遺跡の発掘調査にも着手した。浪江町では、乱塔前遺跡・太刀洗遺跡の順で調査に着手することとした。

各遺跡の調査経過は、浪江町乱塔前遺跡の調査が3,200㎡を対象に4月12日から開始した。大熊町上平A遺跡の調査は、平成16年度の2次調査の継続となる3次調査で、1,830㎡を対象に4月13日から開始し、6月2日には終了した。その後、大熊町での調査を中断し、双葉町上萩平D遺跡の調査を3,400㎡を対象に6月7日から7月29日まで実施した。併行して、双葉町八房平B遺跡の調査を300㎡対象に7月6日から8月2日まで実施した。双葉町の2遺跡は8月3日に引渡しを行っ

た。

浪江町太刀洗遺跡の調査は、平成15年度の1次調査に次ぐ2次調査で、1,800㎡を対象に7月7日から開始した。なお、大熊町上平A遺跡では遺構が調査区南側に広がることが判明したため、1,000㎡を追加対象に8月23日から9月30日まで調査を実施した。乱塔前遺跡の調査が9月2日に終了し、9月22日には引き渡しを行った。

大熊町道平遺跡の調査は、平成14・16年度に次ぐ3次調査で、大川原川の砂防区域を含む530㎡を対象に9月13日から10月5日まで実施した。なお、砂防区域については、いわき工事事務所の要望により、11月16日に埋め戻しを実施した。また、上平A遺跡では、工事工程上、今年度中に調査終了が必要となる510㎡を追加対象に10月12日から11月28日まで調査を実施した。

太刀洗遺跡の調査が10月28日で終了し、11月1日に引渡しを行った。道平遺跡では保存範囲内の町道と工事用道路部分の借地の計800㎡を対象に11月16日から12月1日まで調査を実施した。なお、町道部分を含む460㎡については、いわき工事事務所の要望により11月29日に埋め戻しまで実施した。

大熊町上平B遺跡は、平成16年度の1次調査に次ぐ2次調査で、借地部分の50㎡を対象に10月26日から11月14日まで、調査を実施した。今年度発掘調査を実施した大熊町の3遺跡については12月2日に引渡しを行った。これによって、平成17年度常磐自動車道いわき工区の発掘調査がすべて終了した。このほか12月2日にいわき工事事務所の要望により、上平B遺跡の調査範囲を対象に、埋め戻しを実施した。

(吉野)

第2節 遺跡の位置と自然環境

福島県は東北地方南端に位置し、面積13,782km²である。この内、およそ8割は山地で占められ、東部には太平洋に沿って阿武隈山地、中央部には奥羽山脈、西部には越後山脈がせまっている。これらの山地はほぼ南北に走り、県内は太平洋側より「浜通り地方」・「中通り地方」・「会津地方」の三地域に区分される。

大熊町 第1～4編で扱う上平A遺跡・上平B遺跡・道平遺跡は、浜通り地方中央部の双葉郡内に所在する。行政区分では、双葉郡大熊町大川原地区に位置する。

上平A遺跡は、双葉郡大熊町大字大川原字南平に所在し、北緯37° 22′ 46″、東経140° 58′ 45″に位置する。JR大野駅から南西に約3km、県道いわき・浪江線から東へ1kmの地点に位置する。

上平B遺跡は、双葉郡大熊町大字大川原字南平に所在し、北緯37° 22′ 48″、東経140° 58′ 45″に位置する。遺跡範囲が、上平A遺跡本年度調査区北端と接している。

道平遺跡は、双葉郡大熊町大字大川原字西平に所在し、北緯37° 23′ 20″、東経140° 57′ 49″に位置する。上平A遺跡本年度調査区北端から北へ約80mの地点に位置する。

浜通り地方の地形は、おおむね西の阿武隈高地から東の河岸段丘地帯・海岸低地に向かって標高

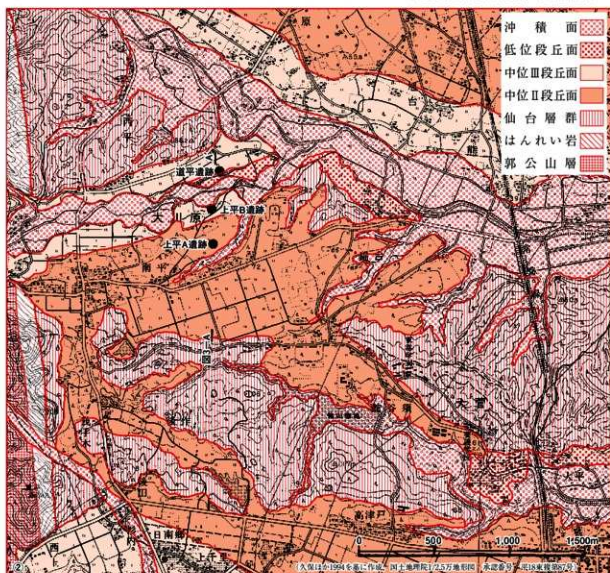
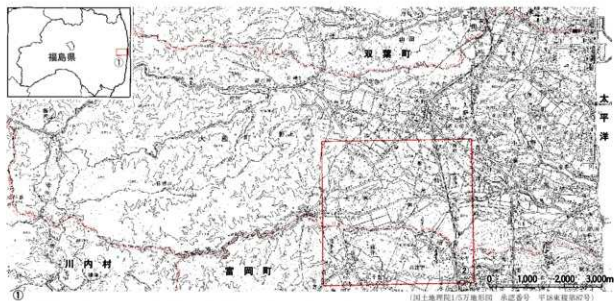


図2 遺跡周辺の環境 (1) (上:大熊町・富岡町の地勢, 下:大熊町・富岡町の地形・地質)

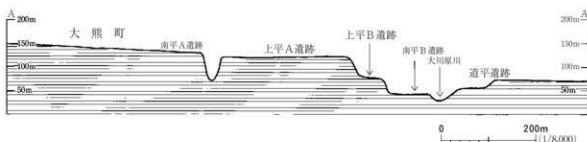


図3 上平A・上平B・道平遺跡間の地形断面図

が低くなり、太平洋に至る。大熊町の西半部は、阿武隈山地東縁部の山地で占められる。阿武隈山地の東縁部、太平洋から西へ約7kmの地点には、標高100mの等高線に沿うように双葉断層が南北に縦走り、山地と河岸段丘地帯の境界をなしている（図2・3参照）。

大熊町を流れる主な河川は、北から夫澤川・小入野川・熊川である。これらの河川は阿武隈山地に源を發し、山間部では險峻で樹枝状の溪谷を刻んでいる。双葉断層の東側に入ると河床勾配は緩やかになり、熊川などの河川両岸には河岸段丘地形が發達している。

この段丘は、標高の高いもの（年代の古いもの）から、高位、中位Ⅰ、中位Ⅱ、中位Ⅲ、中位Ⅳ、低位Ⅰ、低位Ⅱ面と呼ばれている（久保他1994）。この内、富岡・大熊町には主に中位面が發達し、その大部分は隆起扇状地的な山麓河成平坦面を形成している。これら中位段丘面は、更新世後期の最終間氷期（約7～13万年前）の海進・海退に伴って形成されたと考えられている（久保他1994）。

調査した上平A遺跡・上平B遺跡は、共に海岸線から約6km付近に位置している。これらは熊川と富岡川の間に發達した段丘面上に立地している。

上平A遺跡は熊川支流の大川原川右岸にある中位Ⅱ面とされる段丘面上に位置し、遺跡の標高は約74mである。上平A遺跡の南側は標高差約15mの開折谷が刻まれている。上平B遺跡は中位Ⅲ面の段丘面上に立地する。

大熊町の地質構造は、浜通り低地帯の西縁を南北方向に走る双葉断層を境として東西で大きく異なっている。まず断層の西側にあたる阿武隈山地の山間部には、中生代白亜紀の貫入岩の花崗岩類が広く分布している。この阿武隈花崗岩類のなかには、斑縞岩やアプライト、結晶片岩などが散在的に發達する。また花崗岩類に伴出する有用鉱物は多目的に利用され、富岡町には1853年（嘉永6）より磁鉄鉱の採掘が始まった上手岡鉱山も存在し、海岸には砂鉄などの堆積も認められる。さらに双葉断層に沿った周辺では、破砕された未変成・弱変成の古生層（高倉山層・郭公山層）が、帯状に發達している。これら古生層の堆積物には、粘板岩・硬砂岩・チャートなどの堆積岩が含まれる。

本地域では中生代から第三紀中新世の地層の分布は希薄である。ちなみに石器石材として用いられている流紋岩は、第三紀中新世に形成された湯長谷層群們平層・五安層に含まれていることが指摘されている（根本1991）。このことから、本地域で流紋岩を採取することは難しく、們平層・五安層が確認されている橋葉町・広野町・いわき市といった本地域より南に流紋岩の採取可能地が求められそうである。

次に鮮新世に形成された仙台層群は双葉断層東側の丘陵地に広く分布し、第四紀に形成された段丘面の基盤層を形成している。堆積物は半固結のシルト岩・凝灰岩からなり、多くの火山灰層を介在している。

双葉町 第5・6編で扱う上萩平D遺跡・八房平B遺跡は、浜通り地方中央部の双葉郡内に所在する。行政区分では、上萩平D遺跡は双葉郡双葉町山田地区に、八房平B遺跡は双葉郡双葉町石熊地区にある。

上萩平D遺跡は双葉郡双葉町大字山田字萩平に所在し、北緯37° 25′ 37″，東経140° 57′ 49″に位置する。JR双葉駅の南西約4.5km、国道288号線から北へ約400mの地点の地点に位置する。

八房平B遺跡は双葉郡双葉町大字石熊字八房平に所在し、北緯37° 26′ 20″，東経140° 57′ 41″に位置する。上萩平D遺跡の北約1.5km、県道いわき・浪江線から東へ約1kmの地点に位置する。

双葉町の地形を見ると、西部約3分の1は阿武隈山地の東縁に属する。町西部を南北に通る県道いわき・浪江線の西側に南北方向に走る双葉断層があり、この断層が西側の山地と東側の丘陵地とを隔てている（図4参照）。阿武隈山地から東側へ伸びる丘陵地は、町中央部の大半を占めている。この丘陵地は阿武隈山地から東方向へ緩やかに傾斜しながら細長く伸びるように分布し、南側では海岸地域まで達し比高20～30mの海食崖をつくっている。海岸地域北部には小規模の海岸平野が見られる。

双葉町内を流れる主な河川は、前田川とその支流である中田川・戎川・松迫川などがある。前田川の水源地は、浪江町および大熊町との境付近の阿武隈山地にあり、山間部では樹枝状の支谷を形成している。前田川支流の水源地は、阿武隈山地東縁の丘陵地にある。これらの河川によって丘陵地は侵食・分断され、河岸段丘および幅の狭い谷底平野が形成された。

この段丘は、大熊町同様、標高の高いもの（年代の古いもの）から順に、高位から低位Ⅱ面まで8区分され、双葉町内では前田川およびその支流流域、海岸南部に中位面が発達している（久保他1994）。上萩平D遺跡は、前田川右岸の中位Ⅱ面上に位置しており、標高は約85mである。八房平B遺跡は、標高は約150mの丘陵地南法面に位置している。

双葉町の地質構造は、大熊町同様、浜通り低地帯の西縁を南北方向に走る双葉断層を境として東西で大きく異なっている。双葉町域のある双葉断層の東側でも、中生代から第三紀中新世の地層はわずかしか確認されておらず、鮮新世に堆積した仙台層群が広範囲に分布している。仙台層群は、第四紀に形成された段丘面の基盤層を成している。丘陵の間合の谷底平野および海岸付近の沖積平野には、第四紀以降の沖積層が堆積している。（高林）

第3節 歴史的環境

大熊町 大熊町における原始・古代の遺跡については、戦後、竹島國基・楡野照武各氏により精力的な踏査が行われ、大平遺跡をはじめとして、数多くの遺跡が確認、周知されることとなっ

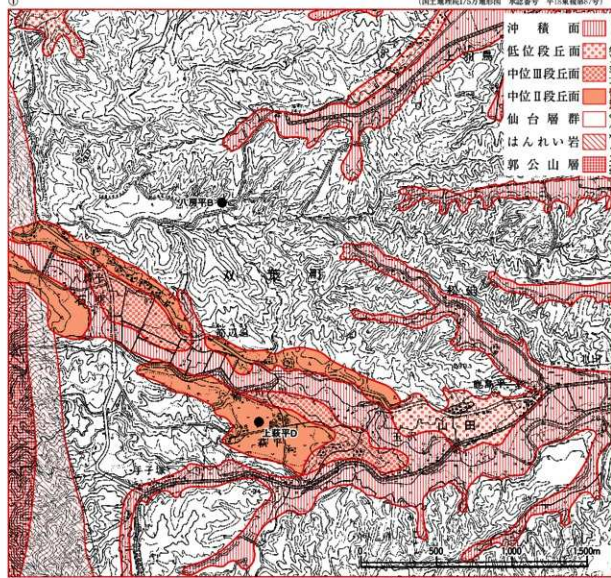
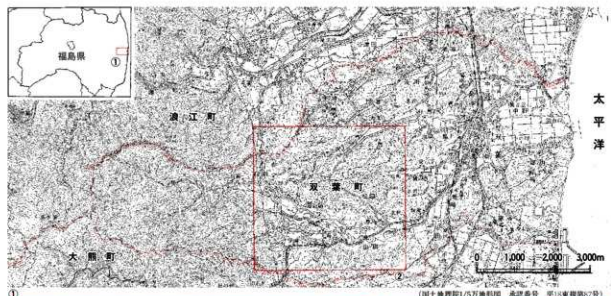


図4 遺跡周辺の環境（2）（上：双葉町の地勢，下：双葉町の地形・地質）

た(図5参照)。その後も大熊町教育委員会による発掘調査や、町史編纂事業にともなう遺跡分布調査が行われ、『大熊町史第二巻』に収録された史料は、縄文時代を中心として福島県内でも屈指のものとなった。

遺跡は、熊川・小入野川・夫澤川の各流域に分布している。特に熊川は中流域から下流域にかけて数多く分布している。

旧石器時代の遺跡としては小入野遺跡・南金谷遺跡・上総屋敷遺跡・北原・日向遺跡・北台遺跡などが知られ、踏査により槍先形尖頭器や削器・彫器などが採集されている。いずれも後期旧石器時代の所産で、上総屋敷遺跡から得られた削器・彫器は旧石器時代末期のものと推定されている。

縄文時代の遺跡は数が最も多い。草創期の遺跡としては長身の尖頭器などが出土した南金谷遺跡や北台遺跡が挙げられる。早期の遺跡では、竹島國基が1957年『石器時代第5号』に三戸式類似の沈線文系土器を報告した大平A遺跡をはじめとして、貝殻沈線文土器や絡条体丘痕文土器が多く出土した砂出遺跡などが知られている。前期になると熊川中・上流域や小入野川流域に遺跡数が増えてくる。1984年に発掘調査された上総屋敷遺跡では浮島I式期の土坑が検出され、今回発掘調査が行われた上平A遺跡からは大木I式期の集落跡が確認されている。小入野川流域の南澤遺跡からは前期後～末葉の好資料が得られている。

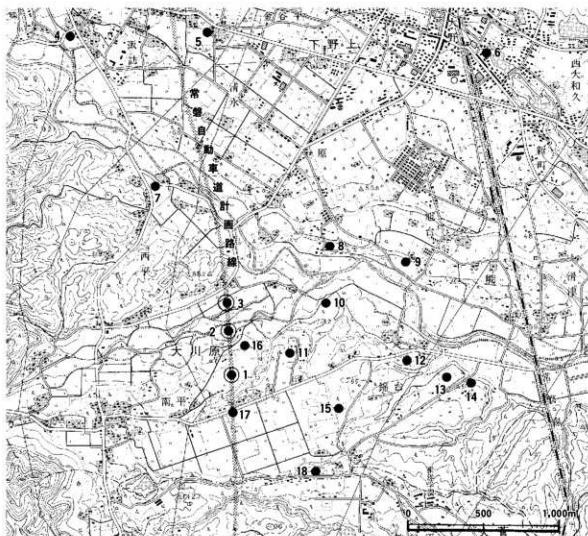
中期も同じく熊川中・上流域や小入野川流域に多く分布している。発掘調査された遺跡はないが、砂出遺跡や蛇巻遺跡、南澤遺跡・腰巻遺跡からは中期中葉～末葉そして後期中葉に至るまでの資料が得られている。いずれも大型の土器片が数多く採集されており、集落跡の存在が推定される。縄文時代後～晩期は、小入野川流域においては晩期初頭で資料の所属時期が途絶えるが、熊川流域においては縄文時代晩期終末～弥生時代まで継続する遺跡が確認されている。砂出遺跡や道平遺跡、落合B遺跡などがそうである。後期は網取I式から新地式まで、晩期は大洞B式から大洞C2式まで継続した後、浮線文系土器が多く出土している。いわゆる大洞A式土器が極端に少なくなる点は東北地方南部の特徴と言えるだろう。

弥生時代の遺跡は比較的少ない。熊川中流域の道平遺跡や落合B遺跡などは縄文時代から継続した遺跡であるが、弥生時代に新たに出現する遺跡となると松ノ下B遺跡程度である。小入野川流域では北原・日向遺跡や女迫遺跡などが確認されている。

古墳時代になると、遺跡は熊川下流域や夫澤川流域に分布するようになる。前期に属する女迫遺跡のような集落遺跡の他に、大塚平古墳や蕨平古墳・熊川古墳・鮎澤古墳のような後期古墳が熊川や夫澤川の沖積地を臨む段丘上に立地し、段丘崖には馬具や直刀が出土したことで知られる長者ヶ原横穴のような横穴墓群が確認されている。

奈良・平安時代の遺跡については羽山嶽遺跡や下田子橋遺跡、和尚前遺跡などが知られているが、詳細については高不明である。ただ、熊川下流沖積地には、熊川六丁目条里跡のような条里遺跡が残されており、今後の調査如何によっては、律令期以後の様相が明らかになる可能性もある。

中世以降になると、橘葉氏や標葉氏等の在地武士団の歴史が文書等に記されるようになる。熊川



(国土地理院1:2.5万地形図 承認番号 平18第48087号)

No	遺跡名	遺跡番号	所在地	遺跡の概要
1	上平A遺跡	54500015	大熊町大字大川原字南平	縄文時代の集落跡
2	上平B遺跡	54500010	大熊町大字大川原字南平	縄文時代の散布地
3	道平遺跡	54500014	大熊町大字大川原字西平	縄文時代の集落跡
4	下谷地窪跡	54500009	大熊町大字野上字諏訪	近世の窪跡
5	南金谷遺跡	54500010	大熊町大字下野上字清水	旧石器時代の散布地
6	断沢古墳	54500011	大熊町大字下野上字大野	古墳
7	上総屋敷遺跡	54500039	大熊町大字大川原字西平	縄文時代の散布地
8	落合B遺跡	54500012	大熊町大字熊字旭台	縄文・弥生時代の散布地
9	落合A遺跡	54500013	大熊町大字熊字旭台	縄文時代の散布地
10	松ノ下A遺跡	54500017	大熊町大字熊字錦台	縄文時代の散布地
11	廻谷地遺跡	54500016	大熊町大字大川原字南平	縄文・奈良・平安時代の散布地
12	松ノ下B遺跡	54500042	大熊町大字熊字錦台	縄文・弥生時代の散布地
13	大平A遺跡	54500019	大熊町大字熊字錦台	縄文時代の散布地
14	大平B遺跡	54500043	大熊町大字熊字錦台	縄文時代の散布地
15	羽山嶽遺跡	54500018	大熊町大字熊字錦台	弥生時代の散布地
16	南平A遺跡	54500062	大熊町大字大川原字南平	縄文時代の散布地
17	南平B遺跡	54500063	大熊町大字大川原字南平	近世の散布地
18	蛇保遺跡	54500041	大熊町大字大川原字南平	縄文・古墳時代の散布地

図5 周辺の遺跡(1)

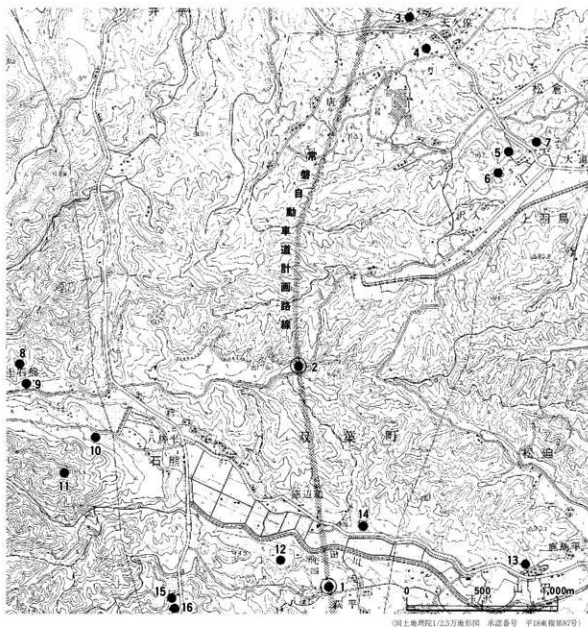
が橋葉郷と標葉郷との境にあたり、佐山館などの城館跡も確認されている。後には標葉郷までが相馬氏の治めるところとなり、毎年7月23日・24日に行われる中村神社の神事である相馬野馬追には騎馬武者が加わっている。この頃の遺跡については知られている数も少ないが、大夫澤遺跡のように中世末期～近世初期に属する蓬萊鏡が出土した遺跡もある。近世後半期になると、18世紀以降浪江町大堀を中心として盛んに行われた陶器窯業が大熊町でも行われるようになり、18世紀後葉の山神窯跡が発掘調査されている。その他、阿武隈高地寄りの山間部では製鉄も行われ、逐一遺跡名を挙げることはできないが、鉄滓が散布している箇所が確認されている。

双葉町 双葉町の遺跡は、前田川とその支流である戎川・中田川流域と、海岸付近の郡山台地に分布している。前田川の上・中流域には、縄文時代の遺跡が多く、前田川下流域、戎川・中田川流域および郡山台地上には、古代以降の遺跡が多く分布している。

旧石器時代の遺跡は、郡山台地にある東原B遺跡と、阿武隈高地東縁にある手子塚A遺跡が知られ、いずれの遺跡も後期旧石器時代に属するものである。手子塚A遺跡は、比較的まとまった資料が出土しており、ナイフ形石器、搔器、ブレイドが確認されている。

縄文時代の遺跡は、草創期の遺跡は見られないが、早期から晩期までの遺跡が確認され、長期間にわたって継続している遺跡が多く見られる。早期の遺跡は、大畑G式土器が出土した手子塚B遺跡がある。手子塚B遺跡では、表採資料であるものの早期から晩期前葉までの土器が確認されており、縄文時代の調査例の少ない双葉町では貴重な資料となっている（図6参照）。前期の遺跡は、早期から継続する手子塚B遺跡、石熊A・B遺跡、寺沢遺跡、郡山貝塚などが知られている。郡山貝塚は、双葉町内で唯一の貝塚で、学術調査が行われた結果、早期末葉の芽山式、前期前葉の宮田Ⅲ群中段階・興津Ⅱ式土器が出土し、前期前葉を中心とした貝塚と判明した。中期の遺跡は、早・前期から存続する手子塚B遺跡、石熊A遺跡、寺沢遺跡、館腰遺跡が確認されている。館腰遺跡では、中期後葉から後期中葉の土器が採集されており、後期まで存続する遺跡である。後期の遺跡は、早・前・中期から存続する手子塚B遺跡、石熊A遺跡、寺沢遺跡、館腰遺跡の他に、石熊C遺跡が確認されている。石熊C遺跡では、後期後葉から晩期中葉の土器が表採されており、晩期まで継続するものと思われる。晩期の遺跡は、継続する手子塚B遺跡、石熊A・C遺跡、手子塚C遺跡がある。手子塚B遺跡からは、大洞B・C式が出土している。手子塚C遺跡からは、大洞A'式土器がまとめて出土しており、縄文時代から弥生時代への移行期と考えられ、縄文時代末から弥生時代初頭のメルクマールとなる資料である。

弥生時代の遺跡は、縄文時代の遺跡と比べ数が少なく、所在場所も郡山台地上に多く分布している。前期の遺跡は、縄文時代晩期末葉から継続する手子塚C遺跡と、猿田沖遺跡がある。猿田沖遺跡からは、中通り地方の御代田式土器並行の土器が出土している。中期の遺跡は、岩井迫遺跡、塚ノ腰遺跡、後迫A遺跡、深谷B遺跡、南迫遺跡がある。塚ノ腰遺跡からは、大型割刃石斧が10点ほど出土しており、双葉町内での弥生時代石器のまとまった資料となっている。後期の遺跡は少なく、南迫遺跡のみである。



No.	遺跡名	遺跡番号	所在地	遺跡の概要
1	上萩平D遺跡	54600137	双葉町大字山田字上萩平	縄文時代の落し穴、古代の本炭焼成坑
2	八房平B遺跡	54600138	双葉町大字石熊字八房平	中世の本炭窯跡
3	仲禅寺跡	54600004	双葉町大字寺沢字唐沢	平安～近代の社寺跡
4	寺沢遺跡	54600005	双葉町大字寺沢字唐沢	縄文・古墳時代の散布地
5	榎内経塚群	54600102	双葉町大字上羽鳥字榎内	平安時代の塚
6	沢入遺跡	54600103	双葉町大字上羽鳥字沢入・榎内	近世の製鉄跡
7	榎内遺跡	54600125	双葉町大字上羽鳥字榎内	近世の製鉄跡
8	石熊D遺跡	54600013	双葉町大字石熊字石熊	近世～近代の製鉄跡
9	石熊B遺跡	54600116	双葉町大字石熊字石熊	縄文時代の散布地
10	蛸離取場遺跡	54600015	双葉町大字石熊字蛸離取場・八房平	縄文・奈良・平安時代の散布地
11	羽山岳遺跡	54600016	双葉町大字石熊字蛸離取場	平安～近世の散布地
12	本通沢遺跡	54600017	双葉町大字山田字本通沢	縄文・奈良・平安時代の散布地
13	北江下窟跡	54600107	双葉町大字山田字北江下	近世～近代の窟跡
14	古岩沢遺跡	54600108	双葉町大字石熊字古岩沢	縄文時代の散布地
15	手子塚B遺跡	54600110	双葉町大字山田字手子塚	縄文時代の散布地
16	手子塚C遺跡	54600111	双葉町大字山田字手子塚	縄文・弥生時代の散布地

図6 周辺の遺跡(2)

古墳時代になると遺跡の分布状況に大きな変化が見られる。各河川の下流域では、主に古墳・横穴墓が分布し、集落跡と思われる遺跡は、郡山台地に集中するようになる。前期・中期の遺跡は、あまり確認されておらず、前期では郡山台地の四郎田B遺跡のみである。戎川流域の猿田沖遺跡からは、中期から後期の土師器が出土している。中田川流域の台古墳群は、5世紀代の古墳と推定されているが、発掘調査が行われていないため正確な年代は不明である。後期の遺跡の分布は、郡山台地に集中するようになり、竪穴住居跡数軒が検出された郡山五番遺跡をはじめ後迫B遺跡、東原A遺跡、西原A遺跡が確認されている。古墳は、前田川・戎川・中田川流域および郡山台地に分布し、地方豪族の墓と考えられる沼ノ沢古墳群も郡山台地にある。横穴墓群は、19箇所確認されており、その分布は前田川右岸域、戎川下流域、中田川左岸域の3つに分けられる。横穴墓総数としては、前田川右岸域が多数発見されている。朱彩された横穴墓を持つ清戸迫横穴墓群は、前田川右岸域にある。遺跡の分布から見ると、政治の中心は郡山台地を含む前田川下流右岸域にあったものと思われる。

奈良・平安時代の遺跡も、古墳時代と同様に郡山台地に集中している。中心となる遺跡としては、標葉郡家跡と推定される郡山五番遺跡がある。その東側に台遺跡、馬場A～D遺跡、南側に後迫A・B遺跡、久保谷地遺跡、西側に西原A～C遺跡、西原沼遺跡などがあり、郡山五番遺跡の周囲にいくつかの集落が存在したと思われる。

中世以降になると、在地武士団である標葉氏が統治するようになり、その一族・重臣の居住地である中田館跡、鴻草館跡、新山城跡などの城館跡が、平地を見下ろせる丘陵上に造られる。15世紀後半には、標葉氏に代わって相馬氏が当地を治めるようになり、1871(明治4)年に廃藩置県が行われるまで相馬氏の治世が続いた。羽山岳遺跡、南迫遺跡などでは、陶器片が採集されている。また、18世紀以降浪江町大堀を中心として盛んに行われた陶器窯業が双葉町内でも行われ、その痕跡が北江下窯跡と、柵内窯跡において確認されている。鉄づくりも行われていたようで、前田川・戎川上流域の七日沢A～C遺跡、石熊D遺跡、榎内遺跡では、鉄滓が確認されている。(高 林)

第4節 調査の方法

平成17年度に調査を実施した、上平A遺跡・上平B遺跡・道平遺跡・上萩平D遺跡・八房平B遺跡では、以下に基づいて行った。

グリッドの設定 第1編上平A遺跡3次調査では、平成14年度に実施した1次調査の基準を踏襲した。国土座標値は、日本測地系公共座標第IX系に一致させ、一辺10mの方眼を単位とした。グリッドの座標値は、第1編図2・3に示した。

上平A遺跡以外の4遺跡のグリッド設定は、世界測地系公共座標に一致させ、上平B遺跡、上萩平D遺跡、八房平B遺跡では、一辺10mの方眼を単位とした。道平遺跡では、平成14年に実施した1次調査と異なり、一辺5mの方眼を単位とした。グリッドの座標値は、上平B遺跡では平成16年

度の1次調査を踏襲し第2編図1中、道平遺跡では第3編図2・第4編図1中、上萩平D遺跡では第5編図2中、八房平B遺跡では第6編図1中にそれぞれ示した。

個別のグリッドは、東西方向に西から東へアルファベットA・B…、南北方向に北から南へ算用数字で1・2…とし、両者を組み合わせて、D6グリッド、F8グリッドなどと呼称している。

第1編上平A遺跡3次調査では、調査区がA1グリッドよりも北へと伸びている。このため、算用数字1から北へと続く算用数字については、南から北へ1・0（ゼロ）・099・098…とし、東西方向のアルファベットと組み合わせて呼称した。

基準線の設定 遺構の平面図を作成するに際しては、各グリッドを1mの方眼に分割し、これを基準線とした。基準線の座標上の位置については、各グリッドの北西端部を原点（E0，S0）とし、ここから東へ1m行くごとにE1～9，南へ1m行くごとにS1～9として表した。これにそれぞれのグリッド番号を組み合わせて、調査区域内全ての基準線の座標位置を表示した。例えば、F10-E2・S9とは、F10グリッドの北西端の杭から、東に2m，南に9m離れた場所を示す。

第3・4編の道平遺跡については、一辺5mグリッドを単位とし、各グリッドの北西端を原点（E0，S0）とし、ここから東へ1m進むごとにE1～4，南へ1m進むごとにS1～4と表示した。

発掘作業 発掘作業では、表土は重機を用いて除去した。その後、人手により包含層を除去し、遺構・遺物の検出作業を行った。

遺構の掘り込み作業にあたっては、各遺構の形状・大きさ、重複関係を留意して、土層観察用のベルトを設定した。竪穴住居跡は4分割法を用いた。土坑など小型の遺構については、長軸方向にベルトを設定した。遺構内から出土した遺物の取り上げに際しては、上記の区画ごとに、層位を確認した上で取り上げた。

遺構外の遺物については、第1編上平A遺跡3次調査、第2編上平B遺跡2次調査において、10mグリッドを4分割し、一辺5mの方眼ごとに取り上げた。この4分割した方眼は、北西から時計回りに「1～4」と番号を付し、例えば、D8グリッド南西の方眼、4番目の方眼から出土した場合、「D8-4」と表示し、併せて遺物の出土層位も付した。

層位名を付す際は、基本層位はローマ数字を用いてLI・LIIと表した。遺構内堆積層は、アラビア数字を用いてℓ1・ℓ2と表した。

記録作成 調査の成果は、実測図と写真で記録した。遺構図は、住居跡が1/20，土坑等の小さなものは1/10の縮尺で作成した。微細な記録が必要と判断したものについては、1/10で随時作成し、調査区内の地形図や遺構配置図は、1/200で作成した。土層観察における色調判断は、『新版標準土色帖』（小山・竹原1997）を基準とした。調査現場での写真撮影は、6×4.5判の中型一眼レフカメラ、デジタルカメラを併用した。

遺物・記録の保管 5遺跡の発掘調査で得られたすべての出土遺物と記録類一式は、報告書作成完了後、遺跡ごとに台帳を作成し、福島県文化財センター白河館（まほろん）に収蔵する予定である。

第5節 縄文土器の分類

平成17年度に調査を実施した、上平A遺跡・上平B遺跡・道平遺跡の調査報告書を作成するにあたり、出土した縄文土器について、以下のように分類した。なお分類については、「常磐自動車道遺跡調査報告37」第2編上平A遺跡の第2章第1節で示されたものを踏襲した。また、平成16年度調査時に新たに確認されたものについては、「常磐自動車道遺跡調査報告41」序章第4節において付け加えられたものを併せて踏襲した。

I 群土器…縄文時代早期の土器

- 1 類…沈線文系土器
- 2 類…条痕文系土器

II 群土器…縄文時代前期初頭～前葉の土器で、口縁部から頸部にかけて文様帯が巡るもの

- 1 類…縄圧痕文を主文様とするもの
- 2 類…集合沈線で文様を描くもの
- 3 類…頸部に段を有するもの
- 4 類…連続する刺突文・爪形文で文様を描くもの
- 5 類…相互刺突文を施すもの
- 6 類…沈線文で文様を描くもの。文様に小瘤を貼付したものも本類とした
- 7 類…沈線文や連続刺突文により区画された重層ループ文を主文様とするもの
- 8 類…沈線文によりコンパス文を描くもの
- 9 類…地文上に連続刺突文を数列加えるもの
- 10類…重層ループ文により文様を施すもの。または、地文間に無文部を残すもの
- 11類…口唇部にのみ装飾を加えるもの
- 12類…口縁上端部にのみ装飾を加えるもの
- 13類…平行沈線文を施すもの
- 14類…1～13類以外の土器

III 群土器…縄文時代前期初頭～前葉の土器で、地文のみの土器

- 1 類…1段摺りの原体で斜行縄文を施すもの
- 2 類…2段摺りの原体で斜行縄文を施すもの
- 3 類…非結束羽状縄文を施すもの
- 4 類…結束第1種原体で羽状縄文を施すもの
- 5 類…ループ文を施すもの
- 6 類…複節斜縄文を施すもの

- 7類…組紐文を施すもの
- 8類…異節斜縄文を施すもの
- 9類…異条縄文を施すもの
- 10類…斜位や横位の捻糸文を施すもの
- 11類…網目状捻糸文を施すもの
- 12類…底部が少しでも確認できるものを一括した。底部に施された文様で細別した
 - a種…斜縄文を施すもの
 - b種…ループ文を施すもの
 - c種…組紐文を施すもの
 - d種…半截竹管による刺突文を施すもの
 - e種…先端が平坦な工具による刺突をもつもの
 - f類…先端が棒状の工具による刺突をもつもの
 - g種…無文のもの
 - h種…分類が不明なもの
 - i種…底部の形状が尖底を呈するもの
- 13類…無文のもの
- 14類…1～12類以外の土器
- IV群土器…縄文時代中期の土器**
 - 1類…大木8 a～8 b式土器
 - 2類…大木9～10式土器
 - 3類…加曾利E式土器
 - 4類…その他・不明
- V群土器…縄文時代後期前葉の土器**
 - 1類…口縁部突起
 - 2類…縄文地に沈線で蕨手文や波状文を描くもの
 - 3類…磨消縄文手法で文様を描くもの
 - a種…縄文帯や無文帯の幅が広かったり、区分がルーズなもの
 - b種…幅の狭い縄文帯や無文帯で文様を描くもの
 - 4類…多条の沈線で文様を描くもの
 - 5類…粗文のもの
 - a種…円形の小突起を有するもの
 - b種…口縁部に横位の沈線や隆線がめぐるもの
 - c種…縄文の施されるもの
 - d種…押捺を加えた隆線がめぐるもの

e 種…条線文の施されるもの

f 種…無文

6 類…その他・不明なもの

VI 群土器…上記に含まれない縄文土器

1 類…縄文時代後期中葉～末葉の土器

2 類…縄文時代晩期の土器

3 類…その他・不明

(阿 部)

引用・参考文献

- 大熊町史編纂委員会編 1984 『大熊町史 第二巻 史料 原始・古代・中世』 大熊町
- 富岡町史編纂委員会編 1987 『富岡町史 第一巻 通史編』 富岡町
- 双葉町史編纂委員会編 1995 『双葉町史 第一巻 通史編』 双葉町
- 鈴木敬治ほか 1991 『浪江・磐城富岡』福島県国土調査・土地分類基本調査 福島県農地林務部農地計画課
- 根本 守 1991 『地質』『楡葉町史 第一巻』 福島県楡葉町
- 久保和也ほか 1994 『浪江及び磐城富岡地域の地質』地域地質研究報告 地質調査所 通商産業省工業技術院
- 福島県教育委員会・財団法人福島県文化振興事業団・日本道路公団
2003 『常磐自動車道道路調査報告37』
- 福島県教育委員会・財団法人福島県文化振興事業団・東日本高速道路株式会社
2005 『常磐自動車道道路調査報告41』
- 福島県教育委員会 1996 『福島県道路地図 浜通り地方』
2002 『福島県内道路分布調査報告 8』
2003 『福島県内道路分布調査報告 9』
2004 『福島県内道路分布調査報告10』
2005 『福島県内道路分布調査報告11』
- 第2・3・5節は「常磐自動車道道路調査報告37」に加筆した。

第1編 ^{うわ だいら}上平A遺跡（3次調査）

遺跡略号 OK—UD・A
所在地 双葉郡大熊町大字大川原字南平
調査期間 平成17年4月13日～6月2日
8月23日～9月30日
10月12日～11月28日
調査員 阿部 知己・高林 真人

第1章 調査経過

上平A遺跡は「福島県遺跡地図」や「大熊町史」に登録・記載された周知の遺跡である。平成8年度に実施された、常磐自動車道の建設予定地を対象とした表面調査により再確認され、その広がりには132,200㎡と提示された（図1参照。福島県教育委員会1997）。

平成14年5月には、常磐自動車道建設地内の一部10,400㎡を対象に試掘調査が実施され、4,800㎡が保存を要する面積とされた（福島県教育委員会2003）。平成15年9月には、段丘の南・北側のそれぞれ3,000㎡・4,100㎡を対象に試掘調査が実施され、段丘南側の3,000㎡が要保存面積とされた。（福島県教育委員会2004）。平成16年9月には、前年度の試掘調査において、要保存範囲から除外された段丘北側斜面部にも、相当量の縄文土器が散布していることが確認された。このため、段丘南端の1,500㎡を対象に再度試掘調査が実施され、要保存面積として1,500㎡が追加された（福島県教育委員会2005）。平成17年8月には、段丘北側斜面肩部の発掘調査の結果、複数の土坑が南へと続くことが確認されたため、1,000㎡が要保存面積として追加された。平成17年10月には、段丘北側斜面において、工事計画変更から工区が広がり、発掘調査の結果、縄文土器を包含している堆積土が続くことが確認されたため、510㎡が要保存面積として追加された。

これまでの試掘調査及び工区拡張等において提示された、常磐自動車道建設地内における保存を要する上平A遺跡の面積は、10,810㎡である。

発掘調査については、遺跡南側の3,300㎡を対象に、平成14年に1次調査が実施された。これに続く2次調査では、遺跡南側を中心とする2,550㎡を対象として平成16年に実施した。以下に、調査の概要を記す。また、発掘調査の概要の説明を簡単にするため、段丘面上で南北の3ヶ所に分かれた調査区については、段丘の南側にある2ヶ所の調査区を「段丘南側調査区」、段丘面の北側にある調査区を「段丘北側調査区」と呼称し、場所を示す表現としている。

4月11日、調査員4名が現地へ赴き、調査の準備や関係機関へ挨拶。4月13日から調査員2名を配置して、条件整備が整った段丘南側調査区の420㎡と、同調査区東端の高速道路東側溝部分を含む300㎡、計720㎡を対象に、重機による表土剥ぎに着手し、平成17年度の発掘調査を開始した。これらの部分は、1・2次調査区のいずれかと接している。4月19日からは段丘北側調査区の斜面肩部及び斜面部を含む1,110㎡を対象に重機による表土剥ぎを開始し、この時点で合計1,830㎡の発掘調査に着手した。4月25日からは作業員を雇用し、本格的に遺構の確認・精査作業を開始した。4月28日には基盤層（LⅣ）上面で、段丘南側調査区のうち420㎡から縄文時代前期の堅穴住居跡を、段丘北側調査区の斜面部では縄文時代後期の土器を包含する堆積層を確認した。この時点で、遺跡の主体となる時代については段丘南側調査区が縄文時代前期、段丘北側調査区では縄文時代後期が主体であることを確認した。

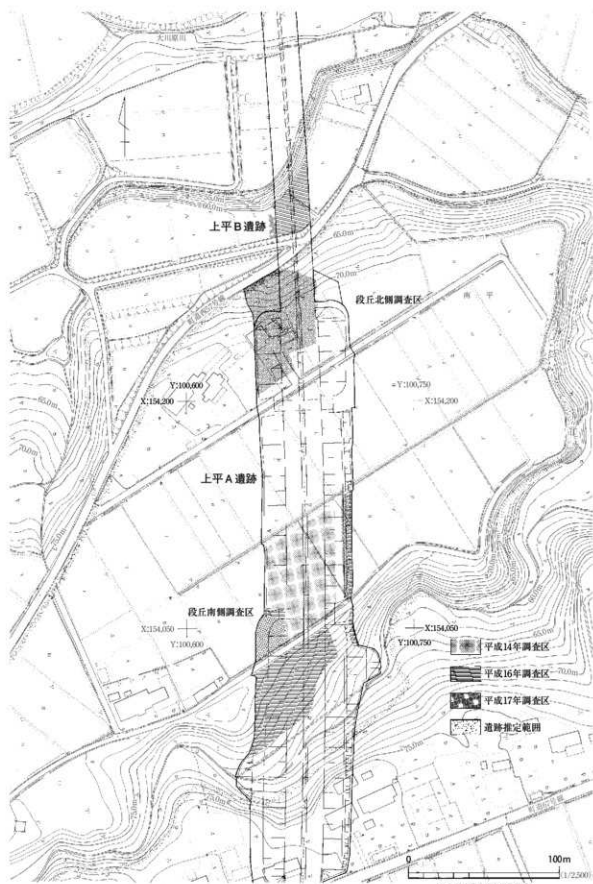


図1 上平A・上平B遺跡調査区位置図

5月9日以降、段丘南側調査区では縄文時代前期の遺構の精査を、段丘北側調査区では縄文土器を包含する赤褐色土層(LⅡ)の掘り下げを進めるとともに、LⅣ上面での遺構の検出・精査を進めていった。段丘北側調査区での遺物包含層の掘り込みが進むにつれ、LⅡ下の黒色土(LⅢ)上面からは1基の土坑(SK79)以外に確認できず、斜面肩部においては縄文時代後期の土坑等を確認した。

5月20日には、段丘南側調査区の420㎡、高速道路東端の側溝部分を含む300㎡、計720㎡の発掘調査が終了した。作業員は段丘北側調査区へ合流し、遺構精査と遺物包含層の掘り下げを継続した。5月27日には、段丘北側斜面肩部において、直径1.5m前後、検出面からの深さ1mほどの土坑を20基確認した。さらに土坑は調査範囲から除外していた調査区南側へ続くことが確認できたため、その旨を福島県教育委員会へ報告し、今後の指示を仰いだ。6月2日には、段丘北側調査区の1,110㎡について地形測量を実施し、発掘調査を終了した。

この間、平成17年度分の上平A遺跡の調査範囲は一部変更された。段丘北側調査区については、土坑の広がりが見られる1,000㎡を追加した。さらに、段丘北側調査区斜面部の西側に隣接する490㎡と、同東側の20㎡が新たに追加された。追加された1,510㎡の部分については、8月以降の調査着手となったため、6月6日から8月上旬まで、上平A遺跡の発掘調査を一時中断した。調査員は、平成17年度4月下旬から5月上旬に行った双葉町の試掘調査の結果、保存を要する面積を生じた双葉町の上萩平D遺跡と八房平B遺跡へ移動し、発掘調査を実施した。

8月11日から、上平A遺跡の発掘調査を再開した。段丘北側

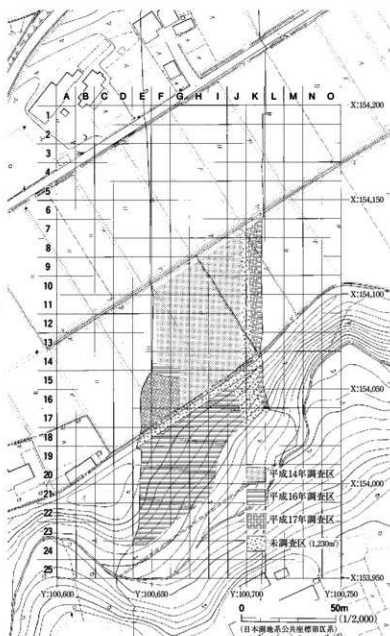


図2 グリッド配置図(1)



図3 グリッド配置図(2)

において平成17年度に新たに追加された1,000㎡の表土はぎに着手し、遺構の検出と検出遺構の精査を実施した。この間、調査の進捗に伴い、調査員の一部を割き、8月上旬から下旬まで浪江町乱塔前遺跡の発掘調査に合流した。

8月23日から作業員を雇用し、遺構の確認・精査作業を再開した結果、段丘北側調査区の段丘の肩部にて29基の土坑が新たに確認され、土坑の総数は合計49基となった。9月30日には1,000

㎡の地形測量を実施し、合計2,830㎡分の発掘調査を終了した。段丘北側調査区の斜面部については、条件整備が整わないことから、上平A遺跡の発掘調査は10月中旬まで再び中断とした。この間、調査の進捗に伴い、調査員の一部を割いて、9月上旬から道平遺跡の発掘調査を実施した。

10月12日からは、新たに追加された段丘北側斜面部の540㎡を対象に、上平A遺跡の発掘調査を再開した。10月14日に作業員を雇用し、遺物包含層の掘削と遺構の確認作業を実施した結果、斜面掘部の遺物包含層であるLⅢ上面において縄文時代後期の竪穴住居跡を2軒確認し、調査を実施した。さらに基盤層であるLⅣ上面で土坑や柱穴が検出され始め、11月中旬には検出遺構の精査を行った。11月下旬には再度検出作業を実施し、掘り残しが無いことを確認した上で、11月28日に平成17年度の発掘調査をすべて終了した。

調査範囲が一部変更されたが、平成17年度に実施した上平A遺跡の最終的な発掘調査面積は3,340㎡である。

福島県教育委員会・財団法人福島県文化振興事業団と東日本高速道路株式会社による現地の引き渡しは、上平A遺跡・上平B遺跡・道平遺跡を合わせて12月2日に実施し、段丘北側斜面部の540㎡調査区の一部については埋め戻しを行った。平成17年度の上平A遺跡の発掘調査で検出した遺構は、竪穴住居跡5軒、土坑49基、木炭窯跡2基、遺物包含層約500㎡と小穴で、発掘調査に要した日数は延べ83日である。

上平A遺跡では、2期線の工事範囲とされた部分、図2～5に「未調査区」として示した、合計1,620㎡が、発掘調査を実施していない範囲として残されている(図4・5参照)。(阿部)

第2章 遺構と遺物

第1節 遺構の分布と基本土層

遺構の分布 (図4・5、写真2～4・口絵)

上平A遺跡3次調査において検出された遺構は、竪穴住居跡5軒、土坑48基、木炭窯跡2基と小穴である。これに、平成14年度の1次調査と、平成16年度の2次調査時に検出した遺構を合わせた数は、竪穴住居跡35軒、竪穴状遺構3基、土坑94基、集石遺構5基、焼土遺構2基、製鉄炉跡3基、木炭窯3基と小穴である。図4には、平成14・16年度の調査成果を合わせて示した。平成14年度の調査で示された等高線については、本来の標高より60cm低いことが2次調査時に確認されたため、これを補正したものを示した。また、3次調査で検出された遺構(縄文時代後期のS I 35・36)のうち、図5中にアミ点を付した遺構については掘り込みが基盤層のLⅣまで達していない。本来は、LⅣ上面の地形を示す図5には表せない遺構であるが、紙面の都合上ここに示した。

平成14年度の1次調査では、圍場整備の終了した部分が対象とされた。ここでは、縄文時代前期の遺構が馬蹄形状に分布することが確認され、中央には遺構がほとんど作られない広場の空間があることが指摘された。図4に示した平成14・16・17年度調査区の等高線の状態から判断すると、1次調査区においては、圍場整備等の工事に伴ってLⅣが上面から20cm程削り取られていることが考えられる。上平A遺跡の占地する段丘上は、現状ではほぼ一様な平坦面であるが、調査区のほぼ中央には、東西に走る幅60mほどの緩やかな尾根地形が見られ、決して段丘上が一様な平坦面ではなかったことが推定できそうである。遺構はこの緩やかな尾根地形の部分に営まれている。1次調査において広場と推定された部分については、ここが尾根に相当するために圍場整備に際してより大きく削平され、遺構が失われたことにより、一見広場のように見えていた可能性が高い。

平成16年の2次調査区では、段丘南端付近に、南東から北西に向かって入る浅い谷があることが新たに確認された。この谷は集落の営まれた縄文時代前期には、ほとんど埋まってしまい、ごく浅い窪地であった。この浅い窪地を縄文時代前期の人々が、集落の南限として意識していたことがうかがわれる。しかし、この時代の遺構は、すべて谷の北側に造られ、この谷と谷南側には遺構が造られていない。

平成17年度の3次調査区のうち段丘南側調査区においては、2次調査区と同様に、縄文時代前期の住居跡と土坑を確認した。また、2次調査区から北に約90m離れた、段丘北側調査区からは、縄文時代後期の土坑群を確認し、裾部においては縄文時代後期の遺物包含層(LⅡ)の堆積状況とともに、LⅢ面上において住居跡を2軒確認した。図6の基本土層C-C'に示した堆積状況を見ると、遺物を包含する褐色土(LⅡ)と、黒色土(LⅢb)は隣接する上平B遺跡へと続くことを確認した。段丘の北裾部については、LⅢ上面が比較的平坦で、縄文時代後期の人々も意識して住居跡を造って



図4 遺構配置図(1)

いたことが分かる。段丘北側の斜面肩部においては、ほとんど重複することなく土坑が掘りこまれており、特に調査区西側に集中している。その内32基の土坑の断面形は袋状を呈する。

基本的には縄文時代前期の竪穴住居跡は、段丘南端付近のある範囲の中に比較的密集して造られ、縄文時代後期の竪穴住居跡は段丘北端の裾部付近に造られていたものと考えている。

基本土層(図6、写真3)

平成17年度に発掘調査を実施した上平A遺跡の段丘南側については、縄文時代前期前葉の竪穴住居跡(SI32・33)よりも北側で、平成14年度の1次調査の対象となった部分同様、圃場整備に伴って削平され、盛土を含めた表土の下に、基盤となる黄色土(LIV)が堆積していた。段丘南側に沿って、表土の下まで掘削の及ばなかった部分から黒褐色土(LII)、その下に褐色土(LIII)を所々に確認できた。これをLI~LVに5区分して調査を進めたところ、概ね1次調査で示された基本土層の一部と一致していた。

一方、段丘北端付近(AOグリッドより北側)の調査区については、段丘面上が宅地や畑の造成に伴って削平され、盛土を

含めた表土(L I)の下は主に基盤をなす黄色土(L IV)が堆積し、南西隅の一部では削平のため砂礫層(L V)が表出する。一方、段丘北側斜面は、比較的堆積した土の遺存状態が良く、これもL I～L Vに5区分して調査を進めたが、1・2次調査で示された基本土層と一致しなかった。むしろ、北に隣接する上平B遺跡の1次調査で示された基本土層の一部(L II・III b)との一致を確認している。

以下では、基本土層の観察を実施した、図3・4の土層断面A-A'～C-C'部分の成果を中心に記載する。なお、図6の土層断面中の太線はL IVを、一部についてはL Vの上面を示している。

L Iは、表土で、段丘南側調査区では圃場整備による削平が著しい。2次調査で対象となった町道南側では、比較的多くの遺物を包含し、町道の北側でも、削平の及ばなかった道沿いから出土した土器も少なくない。段丘南側調査区では主に、縄文時代前期の土器片が多く出土した。段丘北側調査区のL Iは、草木根の影響が顕著であり、下層にL IIが堆積している範囲では縄文時代後期の土器を少なからず包含している。

L IIは、段丘南側調査区においては黒褐色土で、層厚は12～20cmほど、比較的多くの遺物を包含していた。堆積範囲は、圃場整備の実施された範囲を除いて町道に沿って途切れながら堆積し、発掘調査を実施していない町道の下へ続くものと考えている。段丘北側調査区のL IIは、赤褐色砂質土で、斜面上位からの再堆積土と考えている。堆積範囲は、標高67mの斜面中位から調査区北端にかけて、層厚20～30cmほどで堆積している。堆積土は北側へさらに伸び、隣接する上平B遺跡まで及ぶものと考えている。また、各グリッドの094グリッド列とその北側のグリッドからは、縄文時代後期の土器が多く出土し、段丘北側のL IIの堆積がこの時期には始まっていたと考えている。

L IIIは、段丘南側調査区においては褐色土で、層厚はK13グリッドにおいて最大20cmほど、その他での堆積は極わずか、層中に縄文時代前期の土器を少量包含している。堆積範囲は、町道に沿って堆積し、町道の下へ続くものと考えている。段丘北側のL IIIは、黒褐色土で、堆積範囲は標高67mから下位に、層厚は20～30cmほど堆積し、堆積土はさらには北側へ続き、隣接する上平B遺跡



図5 遺構配置図(2)

第1編 上平A道跡 (3次調査)

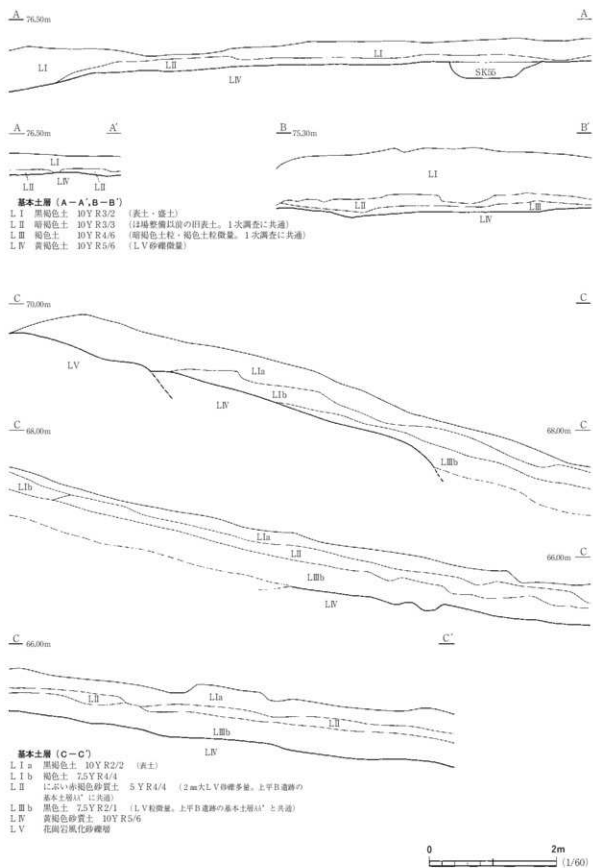


図6 基本土層

まで及ぶものと考えている。縄文時代後期の竪穴住居跡の炉がLⅢ上面で確認できたことから、縄文時代後期の遺構は本層を掘り込んでいる可能性が高い。遺物は、各グリッドの094グリッド列とその北側から、縄文時代後期の土器が比較的多く出土している。

LⅣは、段丘南側そして段丘北側調査区のほぼ全域に堆積する。LⅣは粘土質の黄褐色土で、その上部10cm程度はにごった黄褐色土の、いわゆる漸移層が確認できる部分もある。遺構との関係は、縄文時代前期の竪穴住居跡は、漸移層の上面でおおよそその形を知ることができるが、遺構の詳細な範囲は黄褐色土の上面で確認している。層厚は50～100cmほどで、無遺物層である。

LⅤはLⅣの下に堆積する黄褐色から白色の砂礫層で、段丘の基盤をなす堆積物である。段丘北側の肩部においては表土より50cm下から表出する。

(阿部)

第2節 竪穴住居跡

上平A遺跡の3次調査では、竪穴住居跡5軒の調査を実施した。1・2次調査時の棟数を加えると竪穴住居跡は35軒を数える。この内、35・36号住居跡は縄文時代後期前葉の竪穴住居跡、残りの3軒はすべて縄文時代前期前葉の竪穴住居跡である。住居跡の番号は、2次調査を踏襲して、29番から付けた。30・31号住居跡については、2次調査で報告している。なお、検出当初住居跡と判断したもの、調査の過程で最終的に住居跡と認定できなかったものについては欠番とした。欠番とした住居跡は34号住居跡である。

29号住居跡 S I 29

遺 構 (図7, 写真5)

本住居跡は段丘南側調査区に立地し、1・2次調査区に隣接するF・G15グリッドに位置し、東側6mにはS I 1が造られている。検出面は削平によりLⅡ・Ⅲが既に失われているため、現状ではLⅣ上面である。遺存状態は良好とはいえないが、住居跡の周壁はほぼ確認することができた。

平面形は長方形を基調とするが、北壁は南壁に比べて短い。規模は南北が約2.7mで、東西は北壁で1.8mほど、南壁は2.4mほどである。住居跡内堆積土は3層に区分した。①はLⅣに起因する黄褐色土のブロックが堆積している。堆積状態については明言できないが、土質からは人為的に埋め戻された可能性がある。

住居跡内からは、小穴17個を確認した。P 1・P 2は住居跡のほぼ中央、東西に並んで位置し、規模はP 1が直径15cmで深さ24cm、P 2が直径20cmで深さ27cmである。P 3～P 17は住居の壁際を巡る小穴であるが、北壁際には近接してP 13・14の2個が造られているだけである。これらの小穴は、直径・深さともに10cmほどのものが主体を占めている。P 1・P 2が規模と造られた位置から本住居の主柱穴、P 3～P 17は壁柱穴と考えている。この他、図中に示すように、本住居跡の周辺からは数多くの小穴が検出されている。これらの小穴の規模は、直径15cmほどのものが主体を占め、

壁柱穴に比べて一回り大きい。

遺物(図7)

本住居跡内からは、縄文土器片が8点、散在した状態で出土した。図7-1・3・4は撚糸文が、同図2には0段多糸の縄を用いた斜縄文が施されている。

まとめ

本遺構については、出土土器から縄文時代前期前葉の竪穴住居跡と考えられる。2本の主柱穴と壁際を巡る壁柱穴で上屋を支えていたことが考えられる。本住居跡の周辺からは、1次調査において多くの竪穴住居跡が検出されている。本住居跡もこれらの住居跡と有機的に関連するものと考えられる。(松本)

32号住居跡 S I 32

遺構(図7、写真5)

本遺構は段丘南側調査区に立地し、E16グリッドに位置し、LIV上面で検出された。本遺構の西半部は調査区外に延び、重複する遺構はない。堆積土は2層に分けられる。ℓ1は黒褐色土、ℓ2は暗褐色土で、壁際からの流れ込みが認められることから自然堆積と考えられる。

平面形は南北方向が長い楕円形を呈し、長軸の方位はN10°Eである。規模は、現状の壁上端で南北3.3mを測る。東壁はほぼ直線状で、遺存する壁高は7~12cmを測る。周壁は50~60°の角度で立ち上がる。床面はLIV中に形成され、多少の凹凸は認められるものの、ほぼ平坦である。床面に踏み締まりは認められなかった。

住居跡内からは、小穴3個を確認した。P1は東壁中央、P2・3は北東・南東隅の壁際に位置する。平面形は円形で、直径24~26cm、床面からの深さ19~34cmを測る。断面形はいずれも「U」字形で、造られた位置から、壁柱穴と考えられる。P1堆積土は住居跡堆積土と同質の土であることから自然堆積と考えられる。P2・3は共に褐色土で自然堆積か人為堆積かは判断できなかった。

遺物(図7)

遺物はℓ1から縄文土器片50点が出土し、内5点を図7に示した。5・6はループ文、7・8は組紐文が施されている。9はR撚りとL撚りの原体で菱形状になる羽状縄文を表している。

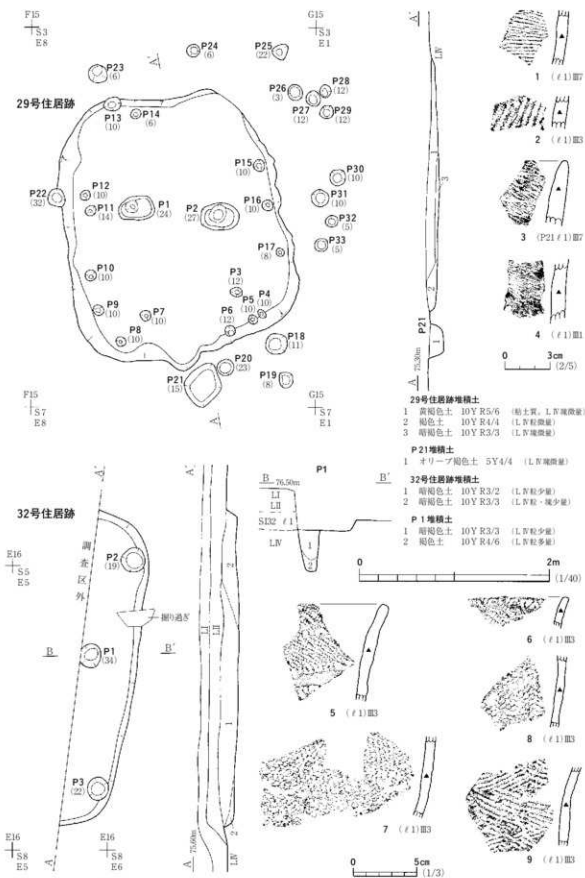
まとめ

本遺構は長軸3.3mの楕円形と推測される竪穴住居跡である。西半部が調査区外に延びるため内容は不明であるが、壁際からは壁柱穴3基が確認されている。時期は出土土器から、縄文時代前期前葉と考えられる。(坂田)

33号住居跡 S I 33

遺構(図8、写真6)

本遺構は、段丘南側調査区南西隅に立地し、E17・F17グリッドにまたがって位置している。重



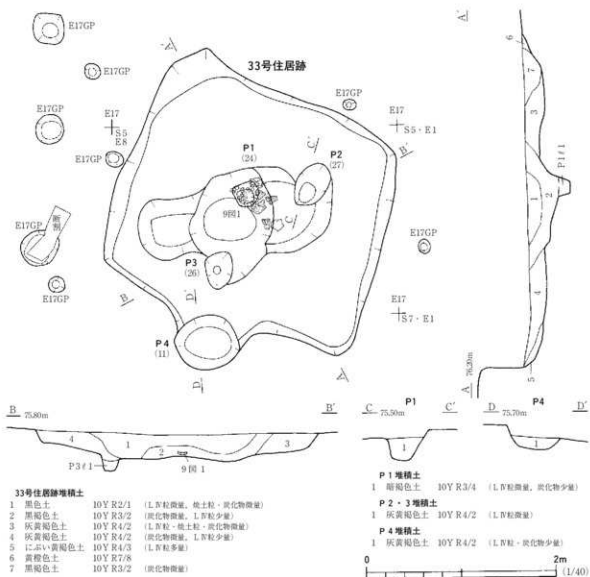


図8 33号住居跡

複する遺構はないが、西南部にSK55が隣接している。遺構検出面はLIV上面である。

堆積土は7層に分けられる。①・②・⑦は黒色系の土、他は黄褐色系の土が堆積している。出土遺物のほとんどがP1中およびP1上の①・②中から出土していることから、①・②が堆積する段階から人為的に埋められた可能性も考えている。③～⑦は壁際からの流れこみが認められることから自然堆積と考えられる。

平面形は隅丸方形を呈し、長軸方位はN約70°Wである。規模は上端で2.9×2.6m、底面で2.7×2.3mを測る。周壁は北西隅部で緩やかに立ち上がり、その他の場所は急な角度で立ち上がっている。底面は多少の凹凸が見られるがほぼ平坦で、P1～3の外周には踏み締まりが認められたことから、床面と判断した。検出面から床面までの深さは28cm、床面中央の最深部までは38cmを測る。床面の中央部分には、P1～3が掘り込まれ、さらにその周囲は床面よりも窪んでいる。

住居跡内からは小穴を4個確認した。P1～3は床面中央に位置し、P4は南壁から外へ60cmほ

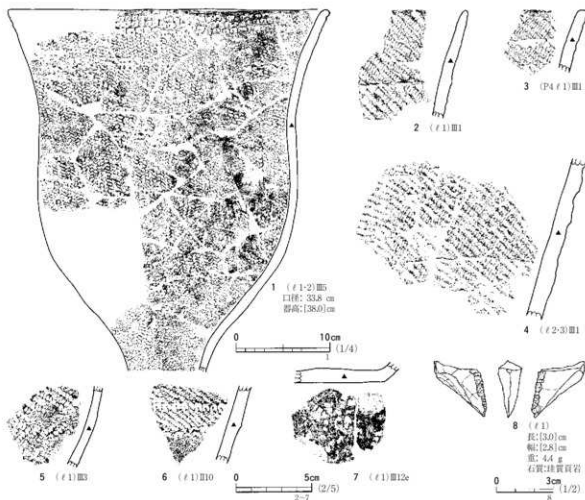


図9 33号住居跡出土遺物

ど張り出している。小穴の平面形は、P1が隅丸方形、その他は楕円形を呈する。小穴の規模は、P1が一辺25cm、P2が50×32cm、P3が38×30cm、P4が70×56cmを測る。床面からの深さはP1～3で24～27cm、P4で11cmを測る。断面形は、いずれも「U」字形で、床面に対してほぼ垂直に掘られている。P1の上層からは、図9-1の土器片がまとめて出土した。

遺物 (図9、写真16)

遺物は堆積土中から283点の縄文土器片・石器が出土し、内8点を図9に示した。出土遺物のほとんどが $\ell 1 \cdot 2$ から出土している。

1はP1の上層からまとめて出土した深鉢形土器で、口縁部に重層ループ文、胴部全面に組紐文を施している。2・3は深鉢口縁部片で斜縄文を施している。4～6はいずれも深鉢胴部片で、4は斜行縄文、5は非結束羽状縄文、6はループ文が施されている。7は底部片で、外面に棒状工具による刺突文が見られる。8は珪質頁岩製の石鏃片である。

まとめ

本遺構は隅丸方形の竪穴住居跡と判断した。炉は無く、柱穴(P1～3)は床面中央から確認された。時期は住居跡の構造および出土遺物から縄文時代前期前葉と考えている。(高林)

35号住居跡 S I 35

遺 構 (図10, 写真7)

本遺構は、段丘北側調査区に立地し、F 093グリッドに位置し、斜面の裾部にある。西に約4 mにはS I 36が造られている。本遺構は、抜根による攪乱等によりL II面で検出することは難しく、L III上面において確認できたのは、住居跡の炉の部分だけで、周壁や小穴は確認できなかった。小穴については、L IIIを20~30cmほど掘り下げL IV上面で確認した。

遺存した部分から、平面形は円形状、推定される床面規模は直径約5.5mとして、図10中に細い実線で表現したが、実際はこれよりも小規模であったものと考えている。住居跡内と想定した内部からは、小穴6個と炉を確認した。小穴は、直径20~30cm、L IV上面からの深さは17~25cmほどであった。L III上面より掘り込まれた時の小穴の深さは40~50cmほどと推測する。しかし、小穴の配置に規則性が無いことから、その性格は特定できない。炉は方形に石を配したもので、想定される床面範囲の中央に位置する。規模は一辺60cmほどで、比較的扁平な礫を配置している。炉詳細図(図10右下B-B')に示したように、礫は掘形内に堆積した ℓ 2で埋められている。また、炉の北西外縁には、47×25cmの扁平な礫を水平にして、掘形に ℓ 2で固定されている。炉内からは焼土や木炭は認められなかった。

遺 物 (図11)

遺物は、住居跡内から24点の縄文土器片と1点の石器が出土し、内12点を図11に示した。これは炉周辺から出土したものが主体である。図11-1・2・9は口縁部に隆帯を横位に巡らせた深鉢形土器の口縁部片で、1・2は隆帯に押捺を加えている。3は深鉢の口縁部片で、外面に「C」字状の隆帯が垂下し、内面には口端部に沿って円形刺突を施す。4~8は、幅の狭い無文帯で文様を描く深鉢の胴部片で、4には蕨手状の文様が描かれている。10は外面に条線文を施した胴部片である。11は器面全体に列点文を施した三十稲葉系の土器である。12は両面加工の不定形石器である。

ま と め

本遺構は、円形状の竪穴住居跡と考えている。床面からは炉と6個の小穴を確認した。時期については、出土遺物から、縄文時代後期前葉と考えている。(阿 部)

36号住居跡 S I 36

遺 構 (図12・13, 写真7)

本遺構は、段丘北側調査区に立地し、E・F 093グリッドに位置し、斜面の裾部にある。東約4 mにはS I 35が造られている。本遺構は、抜根による攪乱等によりL II中で検出することは難しく、L III上面において確認できたのは住居跡の炉の部分と、その北側の集石部分だけで、周壁や小穴は確認できなかった。小穴については、L IIIを20~30cmほど掘り下げ、L IV上面で確認した。

遺存した部分から、平面形は円形状、推定される床面規模は直径約5.7mとして、図12中に細い

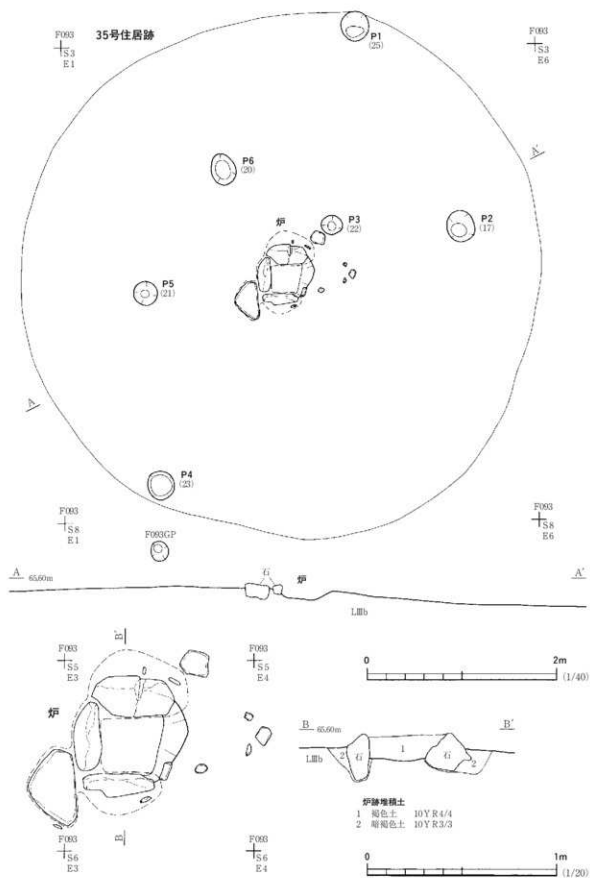


图10 35号住居跡

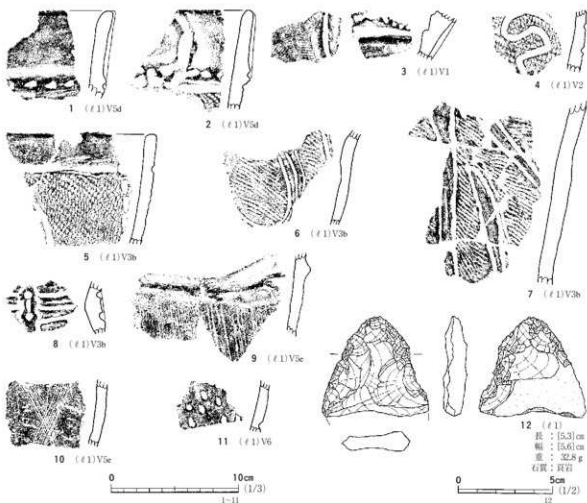


図11 35号住居跡出土遺物

実線で表現しているが、実際はこれよりも小規模であったと考えている。

住居跡内と想定した内部からは、小穴8個と炉そして集石部を確認した。小穴は、直径20~50cm、検出できたLⅣ上面からの深さは15~26cmほどであった。LⅢ上面より掘り込まれた時の小穴の深さは40~50cmほどであったと推測する。しかし、小穴の配置に規則性が無いことから、その性格は特定できない。炉は方形に石を配したもので、想定される床面範囲の中央に位置する。規模は一辺50cmほどで、比較的扁平な礫を配置していたが、炉の北及び東辺の礫は既に失われていた。炉詳細図(図13B-B')に示したように、礫は掘形内に堆積する ℓ 1で埋められている。炉内からは焼土や木炭は認められなかった。

集石部は、炉から約70cm北にあり、住居跡の床面と想定されるLⅢ面上において、土と小児頭大の礫が盛りあがった状況を確認した。集石部詳細図(図13A-A')に示したように、LⅢ面上から2層に分けられた土と共に盛りあげられていることから、本遺構に伴う可能性が高いと考えている。最高部の礫までの高さは床面から35cm程であった。

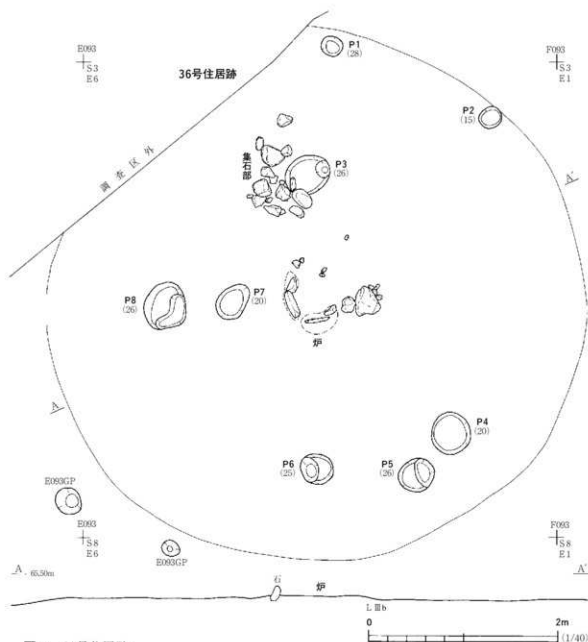


図12 36号住居跡

遺物 (図13)

遺物は、住居跡内から46点の縄文土器片が出土し、内4点を図13に示した。これは炉周辺から出土したものが主体である。図13-1・2は口縁部に沿って横位の沈線を巡らせた深鉢形土器の口縁部片で、波状を呈している。3・4は深鉢の口縁部片で、横位の隆帯を巡らせている。3の隆帯には押捺を加えている。

まとめ

本遺構は、円形状の堅穴住居跡と考えている。床面からは8個の小穴と炉として集石部を確認した。時期については、出土遺物から、縄文時代後期前葉と考えている。(阿部)

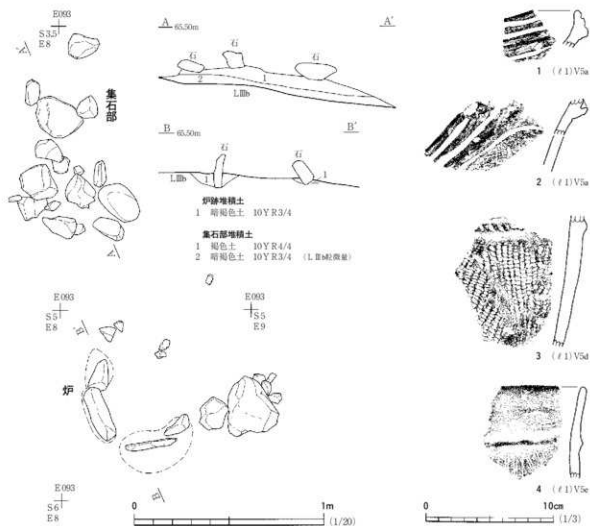


図13 36号住居跡，出土遺物

第3節 土 坑

上平A遺跡3次調査では、48基の土坑を確認した。その内の47基が段丘北側調査区において確認できた。段丘北側調査区では、S K79・103を除くと45基の土坑が斜面肩部に立地している。1・2次調査時の土坑数を加えると、合計94基を数える。土坑の番号は、2次調査を踏襲して、53番から付けた。なお、調査の過程で土坑とは認定できないと確認できたものについては、欠番とした。欠番とした土坑は52・60・66・71号土坑である。

53号土坑 S K53 (図14・26, 写真9)

本土坑は、段丘北側調査区のE・F096グリッドにまたがって位置する。本土坑の西側1m前後にS K57が隣接する。検出面はL IV上面である。

平面形は不整形であるが、南半分の上端については掘り過ぎている。規模は上端で直径約160

cm, 底面で直径112cm, 検出面からの深さは68cmである。周壁は底面から30cmほど上までオーバーハングして立ち上がり, 中端から上端に向かう壁は緩い角度で立ち上がっている。遺構内堆積土は9層に分けられる。ℓ 2～6中にはLⅣ粒を含まれ, 褐色または黄褐色を呈することから, 壁の崩落土と考えている。レンズ状の堆積が観察されることから, 自然堆積と判断した。

遺構内堆積土からは1点の縄文土器が出土した。図26-4は無文地の底部片である。

本土坑については, 断面形状がいわゆる袋状をなすことから貯蔵穴と考えている。時期は, 特徴的な出土遺物が少なく判断し得ないが縄文時代後期と考えている。

54号土坑 SK54 (図14, 写真9)

本土坑は, 段丘北側調査区のE096グリッドに位置する。北東側2m前後にSK78が隣接し, 西側は調査区境と接している。検出面はLⅣ上面である。

平面形は不整形であるが, 南半分の上端については掘り過ぎている。規模は上端で直径約106cm, 底面で直径84cm, 検出面からの深さは73cmである。周壁は底面から40cmほど上までオーバーハングして立ち上がり, 中端から上端に向かう壁は急な角度で立ち上がっている。底面は中央に向かって緩やかに傾斜している。遺構内堆積土は7層に分けられる。ℓ 1～3・5・6中にはLⅣ粒を含まれ, 褐色または黄褐色を呈することから, 壁の崩落土と考えられることから, 自然堆積と判断した。遺構内からの出土遺物はなかった。

本土坑については, 断面形状がいわゆる袋状をなすことから貯蔵穴と考えている。時期は, 特徴的な出土遺物がなく判断し得ないが縄文時代と考えている。

(阿部)

55号土坑 SK55 (図14・26, 写真9・16)

本遺構は, 段丘南側調査区の南西隅のE17グリッドに位置している。重複する遺構はなく, 北東1mにSⅠ33が隣接する。検出面はLⅣ上面である。

平面形は北東部が若干出張った不整形楕円形を呈している。遺構内堆積土は4層に分けられる。上層に灰黄褐色土, 下層に褐色土が堆積している。レンズ状の堆積状況を示しており, 自然堆積土と考えられる。規模は上端で長軸144cm, 短軸88cm, 長軸方位はN約40°E, 検出面からの深さは11cmを測る。周壁はいずれも緩やかに立ち上がり, 底面は平坦である。

本遺構からは縄文土器片22点が出土し, そのうち2点を図26に示した。いずれもℓ 2から出土した深鉢形土器の口縁部片で, 図26-1外面には重層ループ文, 同図2には斜縄文が施されている。

平面形は不整形楕円形の浅い土坑である。機能は特定することは難しい。時期は出土遺物から縄文時代前期前葉と考えている。

(高林)

56号土坑 SK56 (図14, 写真9)

本土坑は, 段丘北側調査区のF096グリッドに位置し, 東側1m前後にSK67, 南東側にSK65

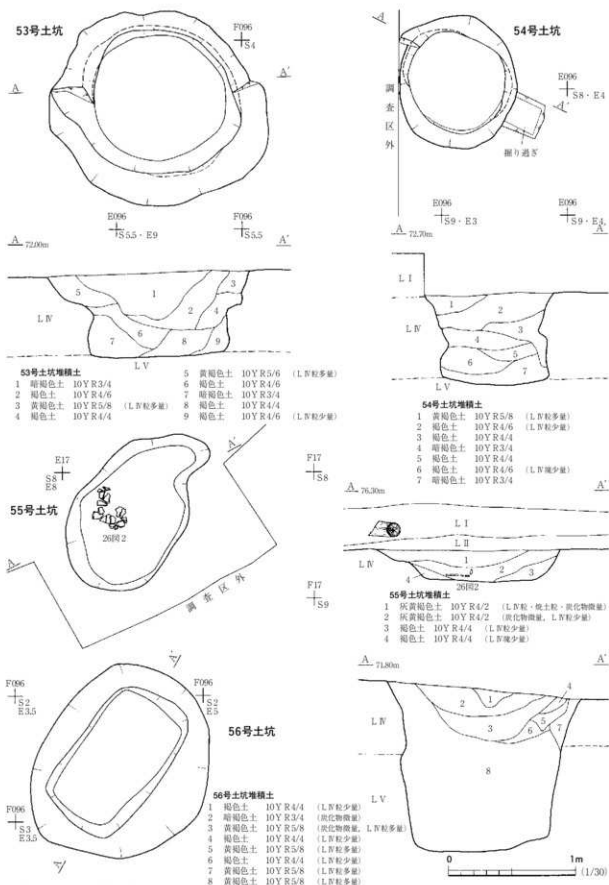


図14 53~56号土坑

が隣接している。検出面はLⅣ面である。

平面形は上端において不整楕円形で、中端で隅丸長方形を呈し、長軸方位はN約30°Eである。規模は中端で長軸124cm、短軸72cm、検出面からの深さは128cmである。周壁は底面から急な角度で立ち上がる。堆積土は8層に分けられる。ℓ1～7までは、レンズ状の堆積状況を示しており自然堆積と判断している。ℓ8については、その土質から人為堆積による可能性が高いと考えている。

本土坑は、規模と形態から落し穴状土坑と考えられる。時期については、出土遺物がなく判断し得ないが、縄文時代と考えている。

57号土坑 SK57 (図15, 写真9)

本土坑は、段丘北側調査区のF096グリッドに位置する。東側1m前後にSK53が隣接している。検出面はLⅣ上面である。

平面形は不整形であるが、東側の先端については掘り過ぎている。規模は上端で直径約160cm、底面で直径154cm、検出面からの深さは68cmである。周壁はオーバーハングして立ち上がる。遺構内堆積土は7層に分けられる。ℓ4～7層中には、周壁の崩落に起因するLⅣ塊が含まれることから、自然堆積と考えている。遺構内からの出土遺物はなかった。

本土坑については、断面形状がいわゆる袋状をなすことから貯蔵穴と考えている。時期は、特徴的な出土遺物がなく判断し得ないが縄文時代と考えている。

58号土坑 SK58 (図15・26, 写真9)

本遺構は段丘北側調査区の東側に立地し、H095グリッドに位置する。北東側2m前後にSK63が隣接する。検出面はLⅣ上面である。

平面形は隅丸方形である。規模は一辺81～92cm、検出面からの深さは24cmを測る。周壁は東壁でやや緩やかに立ち上がる。遺構内堆積土は3層に分けられる。レンズ状の堆積状況を示していることから自然堆積土と考えている。

遺構内堆積土からは2点の縄文土器が出土し、そのうち1点を図26に示した。図26-3は深鉢形土器片で、外面に斜行縄文を施している。

本遺構は浅い不整楕円形の土坑で、その機能を特定することは難しい。時期は出土遺物から縄文時代後期と考えている。

59号土坑 SK59 (図15, 写真9)

本土坑は、段丘北側調査区のG095グリッドに位置する。SK77と重複し、本土坑の方が古い。検出面はLⅣ上面である。

平面形は不整楕円形である。規模は上端の遺存部分で長軸146cm、短軸118cm、検出面からの深さは54cmである。周壁はオーバーハングして立ち上がる。遺構内堆積土は6層に分けられる。ℓ1・

2については、レンズ状の堆積状況を示していることから自然堆積と考えている。ℓ4～7層中には、周壁の崩落に起因すると考えられるLⅣ塊が含まれることから、自然堆積と考えている。

本土坑については、断面形状がわずかに袋状をなすことから貯蔵穴と考えている。時期は、特徴的な出土遺物がなく判断し得ないが縄文時代と考えている。

61号土坑 S K61 (図16, 写真10)

本土坑は、段丘北側調査区のG096グリッドに位置する。S K67と重複し、本土坑の方が古い。検出面はLⅣ上面である。

平面形は不整形である。規模は上端の遺存部分で直径約170cm、底面の直径170cm、検出面からの深さは65cmである。周壁はオーバーハングして立ち上がっている。底面上南東寄りからは直径28cm、深さ23cmの小穴1個を確認した。小穴は底面に対してほぼ垂直に掘られていた。遺構内堆積土は4層に分けられる。レンズ状の堆積状況を示していることから自然堆積と考えている。

本土坑については、断面形状がわずかに袋状をなすことから貯蔵穴と考えている。底面に掘り込まれた小穴の機能については不明である。時期は、特徴的な出土遺物がなく判断し得ないが縄文時代と考えている。

62号土坑 S K62 (図15, 写真9)

本土坑は、段丘北側調査区のG096グリッドに位置する。東側1m前後にS K63、西側1m前後にS K70が隣接する。検出面はLⅣ上面である。

平面形は不整形である。規模は上端の遺存部分で直径約168cm、底面の直径140cm、検出面からの深さは63cmである。周壁はわずかにオーバーハングして立ち上がっている。遺構内堆積土は10層に分けられる。ℓ1・2はレンズ状の堆積状況を示していることから自然堆積と考えている。ℓ3～10については周壁の崩落に起因するLⅣを含んでいることから、自然堆積と考えている。

本土坑については、断面形状がわずかに袋状をなすことから貯蔵穴と考えている。時期は、特徴的な出土遺物がなく判断し得ないが縄文時代と考えている。

63号土坑 S K63 (図16, 写真10)

本土坑は、段丘北側調査区のG096グリッドに位置する。西側1m前後にS K62、北西側1m前後にS K59が隣接する。検出面はLⅣ上面である。

平面形は不整形であったと思われるが、上端南東側は壁の崩落により外側に広がり、図16左下の平面図に示したようにヒサゴ状を呈している。規模は上端の遺存部分で直径約180cm、底面の直径170cm、検出面からの深さは53cmである。周壁は、崩れた西壁を除いてオーバーハングして立ち上がっている。遺構内堆積土は7層に分けられる。ℓ1・2はレンズ状の堆積状況を示していることから自然堆積と考えている。ℓ5～7については周壁の崩落に起因するLⅣを含んでいることが

ら、自然堆積と考えている。

本土坑については、断面形状がわずかに袋状をなすことから貯蔵穴と考えている。時期は、特徴的な出土遺物がなく判断し得ないが縄文時代と考えている。

64号土坑 SK64 (図15・26, 写真10・16)

本遺構は段丘南側調査区の東側、K11グリッドに位置する。周辺には重複する遺構は無く、他の遺構も存在しない。検出面はLIVである。

平面形は隅丸方形である。規模は一辺65～72cm、検出面からの深さは58cmを測る。周壁はいずれも垂直に近い角度で立ち上がっている。断面形は逆台形状を呈する。

遺構内堆積土は7層に分けられる。主体は暗褐色土で、全体に炭化物がわずかに含まれている。図15右下の土層断面A-A'に示したように、ℓ1～4にはレンズ状の堆積状況が認められることから自然堆積、ℓ5～7は人為堆積土の可能性が高いと考えている。堆積状況から判断して、ℓ5～7は柱材の固定するために埋めた土、ℓ1～4は柱材を抜き取った後に堆積した土である可能性が高いと考えている。

本遺構からは縄文土器片8点が出土し、そのうち1点を図26に示した。図26-5はℓ6から出土した深鉢形土器の底部片で、胴部・底部の外面上には斜縄文を施し、胴部内面に炭化物が付着し、その厚さは最大1mmほどであった。

本遺構の機能は、堆積状況から土坑中央部に柱材を立てた柱穴であった可能性が高いと考えている。周囲には同規模の遺構が確認できないことから掘立柱建物跡の柱穴ではないと考えている。また、土坑の規模から判断して、周壁を失った住居跡の柱穴の可能性、または単体で存在した柱穴の可能性を考えている。時期は出土遺物から縄文時代前期前葉と考えている。

縄文土器(図26-5)の内面に付着した炭化物については、年代測定分析を実施した結果、5,610±40 yrBPとの値を得ている(付編1参照)。

65号土坑 SK65 (図17, 写真10)

本土坑は、段丘北側調査区のF096グリッドに位置する。北東1m前後にSK67、北西側1m前後にSK56が隣接する。検出面はLIV上面である。

平面形は不整楕円形であったと思われるが、上端北東側は壁の崩落により外側に広がり、図17左上の平面図に示したようにヒサゴ状を呈している。規模は長軸180cm、短軸168cm、検出面からの深さは71cmである。周壁は、緩やかな角度で立ち上がっている。遺構内堆積土は5層に分けられる。いずれもレンズ状の堆積状況を示していることから自然堆積と考えている。

本土坑については、規模と形態から貯蔵穴と考えている。時期は、特徴的な出土遺物がなく判断し得ないが縄文時代と考えている。

(阿部)

67号土坑 SK67 (図16・26, 写真10)

本土坑は、段丘北側調査区のF096グリッドに位置する。SK61と重複し、本遺構の方が新しい。検出面はLⅣ面である。

平面形は上端において不整楕円形で、中端で隅丸長方形を呈し、長軸方位はN約85°Wである。規模は中端で長軸160cm、短軸72cm、検出面からの深さは121cmである。周壁は西及び南壁でわずかにオーバーハングするものの、ほぼ垂直に立ち上がっている。堆積土は9層に分けられる。ℓ1～3までは、レンズ状の堆積状況を示しており自然堆積と判断している。ℓ4～9については、周壁の崩落に起因するLⅣ・LⅤを含んでいることから、自然堆積と考えている。

遺構内堆積土からは縄文土器片1点出土し、図26に示した。図26-6は斜縄文を施している。

本土坑は、規模と形態から落し穴状土坑と考えられる。時期については、出土遺物が少なく判断し得ないが、縄文時代と考えている。

68号土坑 SK68 (図16・26, 写真10)

本遺構は段丘北側調査区の東側に立地し、H095グリッドに位置する。北東側2m前後にSK75が隣接する。検出面はLⅣ上面である。

平面形は不整楕円形である。規模は長軸133cm、短軸118cm、検出面からの深さは22cmを測る。周壁は緩やかな角度で立ち上がる。遺構内堆積土は3層に分けられる。レンズ状の堆積状況を示していることから自然堆積土と考えている。

遺構内堆積土からは縄文土器が6点出土し、それらの内2点を図26に示した。いずれも深鉢形土器片で、図26-7は磨消縄文手法で文様を描き、同図8は網目状捺糸文を施している。

本遺構は浅い不整楕円形の浅い土坑で、その機能を特定することは難しい。時期は出土遺物から縄文時代晩期と考えている。

69号土坑 SK69 (図17, 写真10)

本遺構は段丘北側調査区の斜面肩部に立地し、H095グリッドに位置する。南東側2m前後にSK58・68が隣接する。検出面はLⅣ上面である。

平面形は不整円形である。規模は直径150cm、検出面からの深さは60cmを測る。周壁は緩やかな角度で立ち上がる。遺構内堆積土は5層に分けられる。いずれも周壁の崩落に起因するLⅣを含んでいることから、自然堆積土と考えている。

本遺構は不整円形の浅い土坑で、その機能を特定することは難しい。時期は出土遺物がなく不明である。

(高 林)

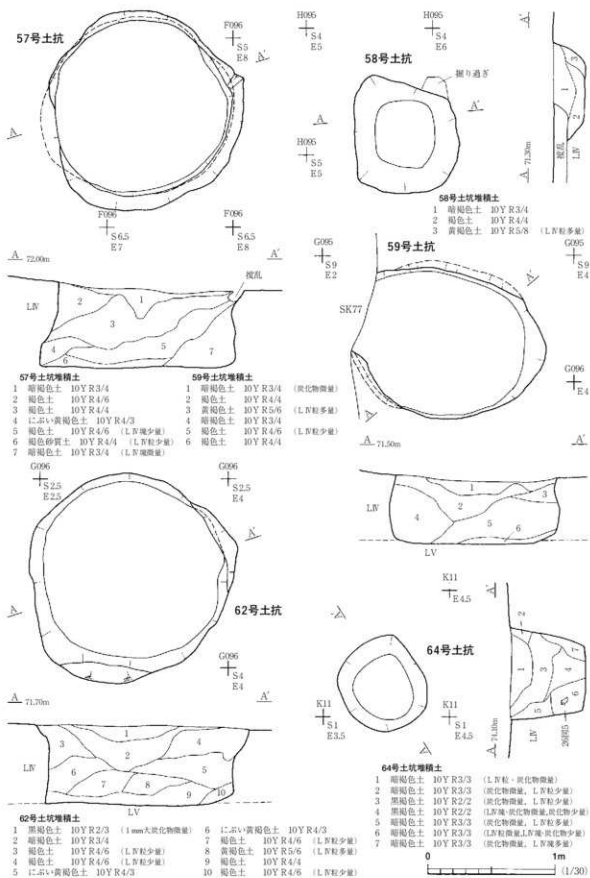


図15 57~59・62・64号土坑

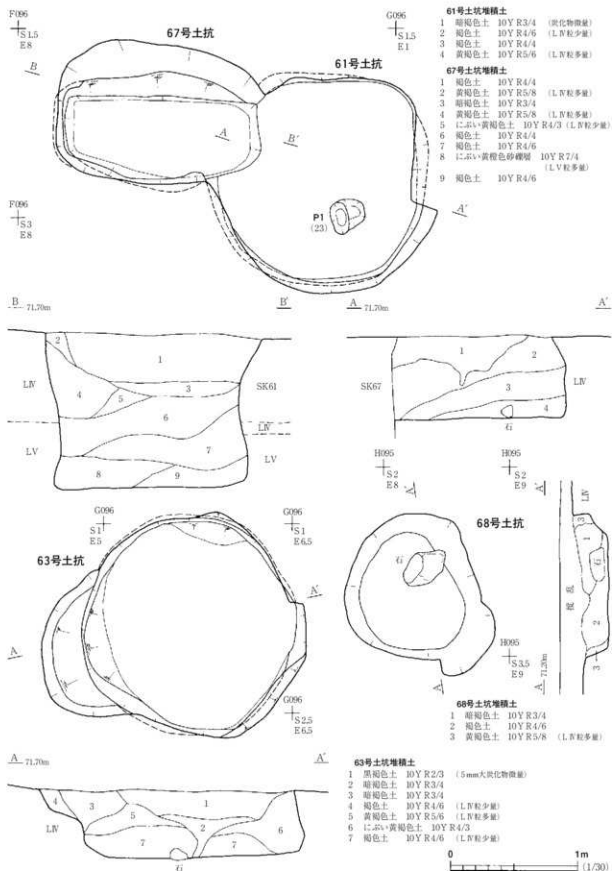


図16 61・63・67・68号土坑

70号土坑 SK70 (図17・26, 写真11・16)

本土坑は、段丘北側調査区のF096グリッドに位置する。SK73と重複し、本土坑が新しい。周囲1m前後にはSK72・82・89が隣接する。検出面はLIV上面である。

平面形は不整楕円形であったと思われる。図17左下の平面図では、重複するSK73の完掘後の状況も合わせて表現しているため、図では本土坑の上端が南西に張り出したように描いてある。

規模は長軸150cm、短軸120cm前後、検出面からの深さは68cmである。周壁は垂直に近い角度で立ち上がっている。遺構内堆積土は6層に分けられる。ℓ1～4がレンズ状の堆積状況を示し、ℓ5・6は周壁の崩落に起因するLIVを含んでいることから自然堆積と考えている。

遺構内堆積土から縄文土器片が1点出土し、図26に示した。図26-9は平行沈線文と連続する爪形文を上下交互に施文している。

本土坑については、規模と形態から貯蔵穴と考えている。時期は、図26-9が浮島式土器と考えられることから縄文時代前期後半と考えている。

72号土坑 SK72 (図18・26, 写真11)

本土坑は、段丘北側調査区のF・G096グリッドに位置する。西側1m前後にSK70が、東側1m前後にSK92が隣接する。検出面はLIV面である。

平面形は上端において不整円形である。規模は上端で直径170cm、検出面からの深さは103cmである。周壁はオーバーハングして立ち上がっている。堆積土は11層に分けられる。ℓ2～7については、周壁の崩落に起因するLIVの塊を含んでいることから、自然堆積と考えている。ℓ9についてはいわゆるフラスコ状土坑の堆積土に見られる中央が高い小山状の堆積状況が認められる。

遺構内堆積土から縄文土器片が4点出土し、その内の1点を図26に示した。図26-10は条線文を施した深鉢形土器片である。

本土坑は、断面形状がいわゆる袋状をなすことから貯蔵穴と考えている。時期は、出土遺物から縄文時代後期と考えている。

73号土坑 SK73 (図17, 写真11)

本土坑は、段丘北側調査区のF096グリッドに位置する。SK70と重複し、本土坑が古い。周囲1m前後にはSK72・82・89が隣接する。検出面はLIV上面である。

平面形は不整楕円形であったと思われる。図17左下の平面図では、重複するSK70の完掘後の状況も合わせて表現しているため、図では本土坑の上端が北に張り出したように描いてある。

規模は遺存した部分で長軸86cm、短軸60cm以上、検出面からの深さは88cmである。周壁はSK70に壊されずに残存した南側ではオーバーハングして立ち上がっている。底面はSK70の底面よりも6cmほど低くなっている。遺構内堆積土は遺存した部分で2層に分けられるが、特に堆積状況を示

すような知見は得られなかった。

本土坑については、南側の断面形状がいわゆる袋状をなすことから貯蔵穴と考えている。時期については出土遺物がなく判断し得ないが、重複関係から縄文時代前期と考えている。

74号土坑 S K74 (図18・26, 写真11)

本土坑は、段丘北側調査区のF096グリッドに位置する。東側1m前後にS K84が、南側1m前後にS K81が隣接する。検出面はLⅣ面である。

平面形は上端において不整楕円形である。規模は長軸170cm、短軸150cm、検出面からの深さは70cmである。周壁は垂直に近い角度で立ち上がっている。堆積土は5層に分けられる。レンズ状の堆積状況が認められることから、自然堆積と考えている。

遺構内堆積土から縄文土器片が2点出土し、その内の1点を図26に示した。図26-11は外面に斜行縄文を施した深鉢形土器片である。

本土坑は、規模と形態から貯蔵穴と考えている。時期は出土遺物から縄文時代後期と考えている。

75号土坑 S K75 (図18・26, 写真11)

本土坑は、段丘北側調査区の東側に立地し、I095グリッドに位置する。南西側2m前後にS K68が隣接する。検出面はLⅣ面である。

平面形は不整楕円形、長軸方位はN約30°Wである。規模は上端で長軸141cm、短軸121cm、底面で長軸161cm、短軸101cm、検出面からの深さは62cmである。周壁はオーバーハングして立ち上がっている。堆積土は6層に分けられる。ℓ2～4については、周壁の崩落に起因するLⅣの塊を含んでいることから、自然堆積と考えている。

遺構内堆積土から縄文土器片が1点出土し、図26に示した。図26-12は斜縄文を施した深鉢口縁部片である。

本土坑は、断面形状がいわゆる袋状をなすことから貯蔵穴と考えている。時期は、出土遺物が少なく判断し得ないが縄文時代後期と考えている。

76号土坑 S K76 (図19, 写真11)

本土坑は、段丘北側調査区の東縁に立地し、I094グリッドに位置する。東側は調査区の外で、南西側5m前後にS K75がある。検出面はLⅣ面である。

平面形は上端において不整形である。規模は直径約130cm、検出面からの深さは63cmである。周壁は急な角度で立ち上がっている。堆積土は5層に分けられる。ℓ1～3・5については、周壁の崩落に起因するLⅣの塊を含んでいることから、自然堆積と考えている。

本土坑は、規模と形態から貯蔵穴と考えている。時期は出土遺物がなく判断し得ないが、縄文時代と考えている。

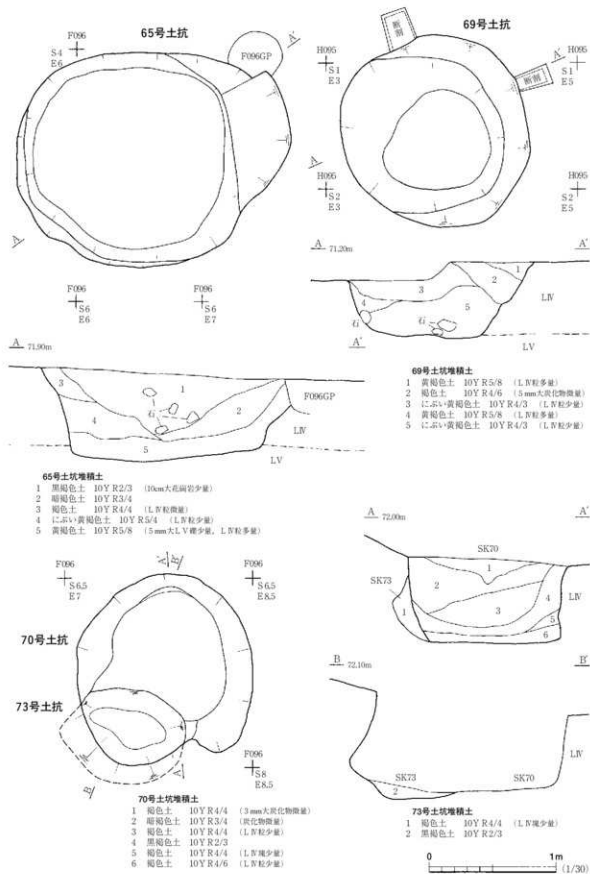


図17 65・69・70・73号土坑

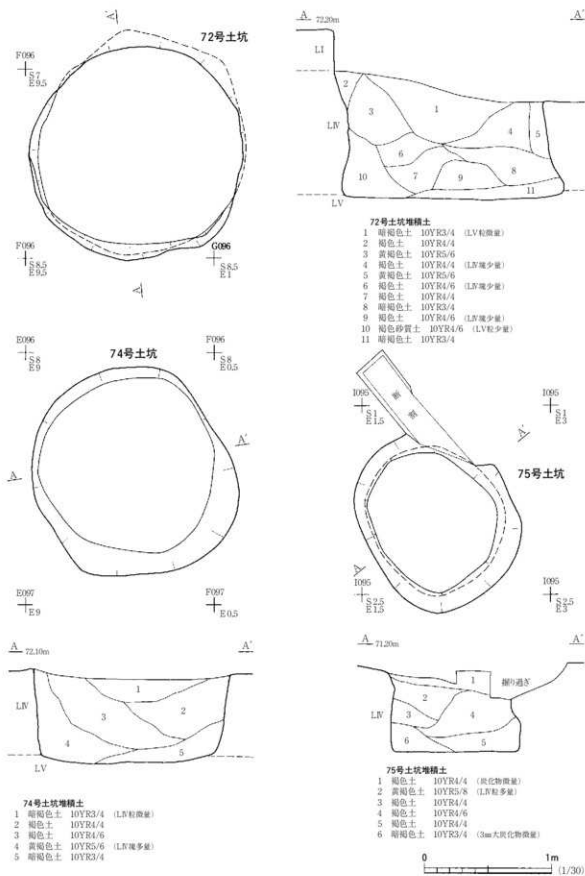


图18 72・74・75号土坑

77号土坑 SK77 (図19, 写真11)

本遺構は段丘北側調査区のG095グリッドに位置する。SK59と重複し、本土坑が新しい。西側2m前後にSC3が隣接する。検出面はLV面で、東西に位置する2基の木炭窯跡のための作業場底面から確認した。

平面形は隅丸長方形である。規模は長軸157cm、短軸122cm、検出面からの深さは50cmを測る。周壁は西壁でオーバーハングし、東壁で緩やかな角度で立ち上がる。遺構内堆積土は4層に分けられる。レンズ状の堆積状を示していることから自然堆積土と考えている。

本遺構は浅い隅丸長方形の土坑で、その立地から2基の木炭窯跡(SC2・3)との関連が考えられる。本土坑の機能については、木炭窯構築用の粘土に混ぜる砂を採取した穴である可能性が高いと考えている。時期は木炭窯跡と同じ近代と考えている。

78号土坑 SK78 (図19・26, 写真11)

本土坑は、段丘北側調査区の東端付近に立地し、E096グリッドに位置する。西側は調査区の外で、南西側1m前後にSK54がある。検出面はLV面である。

平面形は上端において不整形である。規模は直径約204cm、検出面からの深さは49cmである。周壁は西壁でオーバーハングし、東壁では急な角度で立ち上がっている。堆積土は5層に分けられる。②～⑤については、レンズ状の堆積状を示していることから自然堆積土と考えている。①については、層の境に沿ってに拳大の礫が70個ほど出土していることから、人為堆積と考えている。

遺構内堆積土から縄文土器片が1点出土し、図26に示した。図26-13は器面に列点文を施した深鉢の胴部片である。

本土坑は、規模と形態から貯蔵穴と考えている。時期は出土遺物が少なく判断し得ないが、縄文時代後期と考えている。

(阿部)

79号土坑 SK79 (図19, 写真11)

本土坑は段丘北側調査区の斜面裾部に立地し、G092・093グリッドにまたがって位置している。重複する遺構はなく、近辺に他の遺構はなかった。検出面はLV上面である。

平面形は南北方向に長い不整形円形で、長軸方位はN20°Eである。規模は長軸145cm、短軸109cm、検出面からの深さは22cmを測る。周壁は東壁でやや緩やかに立ち上がり、その他では急な角度で立ち上がっている。底面は中央部が一段低くなっている。遺構内堆積土は3層に分けられる。壁際からの流れ込みの様相が認められることから自然堆積土と考えている。

本遺構は浅い不整形円形の土坑で、その機能を特定することは難しい。時期は出土遺物がなく不明である。

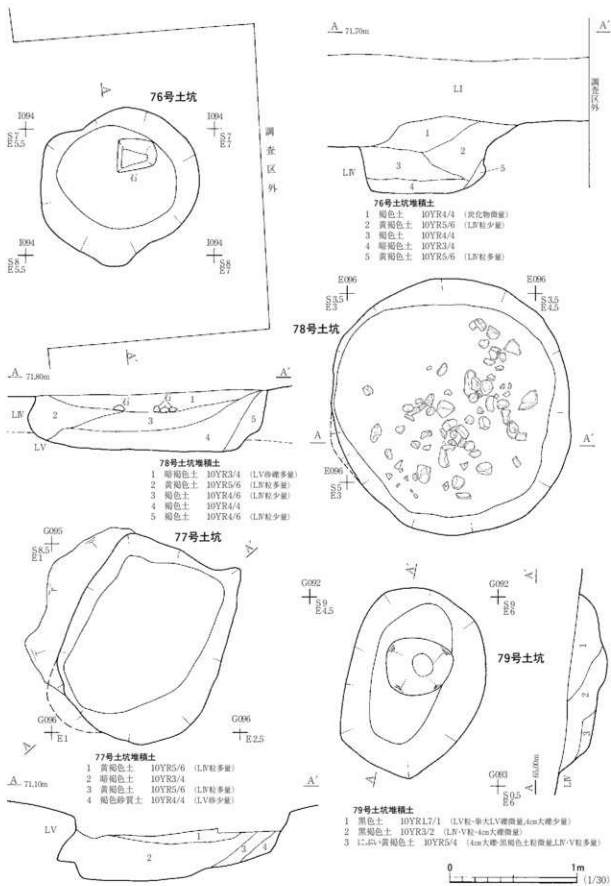


図19 76~79号土坑

80号土坑 S K 80 (図20, 写真12)

本土坑は、段丘北側調査区のF097グリッドに位置する。南側10cm前後にS K 87が隣接する。検出面はL IV面である。

平面形は不整楕円形、長軸方位はN約30° Wである。規模は上端で長軸148cm、短軸132cm、底面で長軸110cm、短軸101cm、検出面からの深さは62cmである。周壁は西壁を除いてオーバーハングして立ち上がっている。堆積土は5層に分けられる。ℓ 1～3については、周壁の崩落に起因するL IVの塊を含んでいることから、自然堆積と考えている。ℓ 4・5についてはいわゆるフラスコ状土坑の堆積土に見られる中央が高い小山状の堆積状況が認められる。

本土坑は、断面形状がいわゆる袋状をなすことから貯蔵穴と考えている。時期は、出土遺物が少なく判断し得ないが縄文時代後期と考えている。

81号土坑 S K 81 (図20・26・27, 写真12・16)

本土坑は、段丘北側調査区のE・F097グリッドに位置する。北側1m前後にS K 74、南東側1m前後にS K 86が隣接する。検出面はL IV面である。

平面形は不整楕円形で、長軸方位はN約50° Wである。上端北東側は崩落し三日月状に張り出している。規模は上端で長軸190cm、短軸150cm、底面は長軸159cm、短軸144cm、検出面からの深さは82cmである。周壁はわずかにオーバーハングして立ち上がっている。堆積土は7層に分けられる。ℓ 1～7については、周壁の崩落に起因するL IVの粒を含むことから、自然堆積と考えている。

遺構内堆積土からは17点の縄文土器片が出土し、そのうち5点を図26・27に示した。いずれも深鉢形土器片である。図26-14は縄文地に沈線で波状文を描いている。同図15は口縁部下端に横位の隆帯を、同図17は口縁部に「C」字状の隆帯が垂下し、口縁下端には押圧を加えた隆帯を巡らせている。同図16は器面に斜縄文を施す。図27-1は板状把手を張り付けた両耳壺で、口縁部には「C」字状の隆帯が垂下し、胴部縄文地には沈線で「し」字状文を描いている。

本土坑は、断面形状がいわゆる袋状をなすことから貯蔵穴と考えている。時期は、出土遺物から縄文時代後期前葉と考えている。

82号土坑 S K 82 (図20, 写真12)

本土坑は、段丘北側調査区のF096グリッドに位置する。東側1m前後にS K 70・73、南東1m前後にS K 89が隣接する。検出面はL IV面である。

平面形は不整楕円形である。規模は上端で長軸128cm、短軸111cm、底面で長軸128cm、短軸118cm、検出面からの深さは72cmである。周壁は北東壁を除いてオーバーハングして立ち上がっている。堆積土は6層に分けられる。ℓ 1～5については、周壁の崩落に起因するL IVの塊を含んでいることから、自然堆積と考えている。ℓ 6の底面付近には極わずかに炭化物を含んでいた。

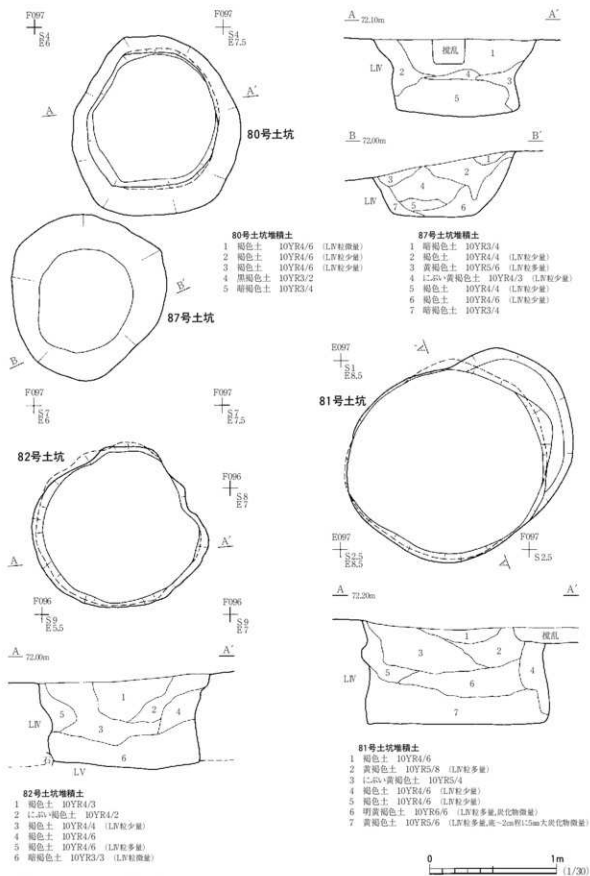


图20 80~82·87号土坑

本土坑は、断面形状がいわゆる袋状をなすことから貯蔵穴と考えている。時期は、出土遺物がなく判断し得ないが底面出土の炭化物の年代から縄文時代後期と考えている。

本土坑の底面から採取した炭化物については、樹種同定分析及び年代測定分析を実施した結果、樹種は「クリ」で、年代は $3,920 \pm 40$ yr BPとの値を得ている（付編1・2参照）。

83号土坑 S K83（図21・27、写真12）

本土坑は、段丘北側調査区のF097グリッドに位置する。東側2m前後にS K90、南側2m前後にS K80、北側2m前後にS K89がある。検出面はL IV面である。

平面形は不整楕円形、長軸方位はN約 60° Eである。上端の南西側は崩落し、三日月状に張り出している。規模は上端で長軸208cm、短軸164cm、底面で長軸150cm、短軸140cm、検出面からの深さは1mである。周壁は北西壁を除いてオーバーハングして立ち上がっている。堆積土は13層に分けられる。ℓ7～13については、周壁の崩落に起因するL IVの塊を含んでいることから、自然堆積と考えている。

遺構内堆積土からは7点の縄文土器片が出土し、そのうち2点を図27に示した。図27-2・3は、いずれも深鉢の胴部片で器面に斜行縄文を施している。

本土坑は、断面形状がいわゆる袋状をなすことから貯蔵穴と考えている。時期は、出土遺物が少なく判断し得ないが縄文時代後期と考えている。

84号土坑 S K84（図21、写真12）

本土坑は、段丘北側調査区のF096・097グリッドに位置する。東側2m前後にS K82、西側2m前後にS K74、南側2m前後にS K86がある。検出面はL IV面である。

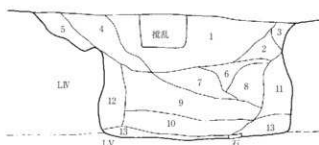
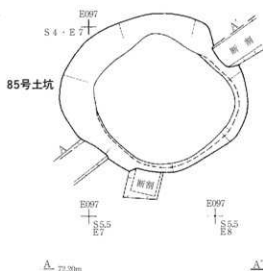
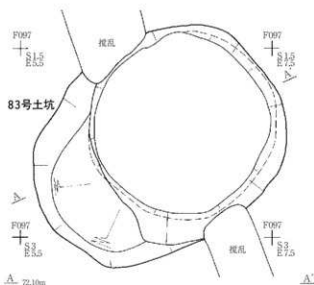
平面形は上端においてヒサゴ形状を呈し、長軸方位はN約 40° Wである。上端の北西側は崩落し、三日月状に張り出しているが、本来は円形状であったと考えている。規模は上端で長軸244cm、短軸209cm、底面は円形で直径約200cm、検出面からの深さは75cmである。周壁はオーバーハングして立ち上がっている。堆積土は10層に分けられる。ℓ4～9については、周壁の崩落に起因するL IVの塊を含んでいることから、自然堆積と考えている。

本土坑は、断面形状がいわゆる袋状をなすことから貯蔵穴と考えている。時期は出土遺物がなく判断し得ないが縄文時代と考えている。

85号土坑 S K85（図21・27、写真12・16）

本土坑は、段丘北側調査区西側に立地し、E097グリッドに位置する。北東側2m前後にS K81、がある。検出面はL IV面である。

平面形は不整楕円形、長軸方位はN約 80° Wである。規模は上端で長軸149cm、短軸126cm、底面で長軸115cm、短軸104cm、検出面からの深さは57cmである。周壁はオーバーハングして立ち上がっ

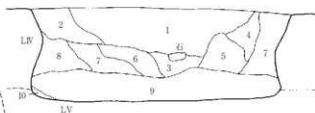
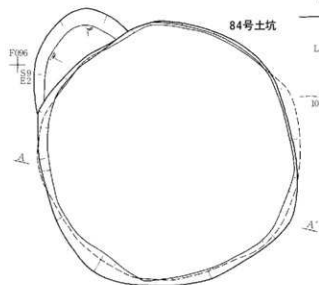


83号土坑堆積土

- | | |
|----------------------------|--------------------------|
| 1 黒褐色土 10YR2/3 (5mm大炭化物微量) | 7 紅・黄褐色土 10YR4/3 |
| 2 褐色土 10YR4/6 (LV粒少量) | 8 褐色土 10YR4/4 (LV粒少量) |
| 3 黄褐色土 10YR5/6 (LV粒多量) | 9 褐色土 10YR4/6 (LV粒少量) |
| 4 褐色土 10YR4/4 (5mm大LV粒少量) | 10 紅・黄褐色土 10YR4/3 |
| 5 黄褐色土 10YR5/6 (LV粒少量) | 11 紅・黄褐色砂質土 10YR5/4 |
| 6 暗褐色土 10YR3/3 | 12 紅・黄褐色砂質土 10YR5/4 |
| | 13 褐色砂質土 10YR4/6 (LV粒少量) |

85号土坑堆積土

- | |
|----------------------------------|
| 1 暗褐色土 10YR3/4 |
| 2 褐色土 10YR4/6 (LV粒少量) |
| 3 褐色土 10YR4/4 (LV粒少量) |
| 4 褐色土 10YR4/6 (LV粒少量) |
| 5 紅・黄褐色土 10YR4/3 (LV粒少量) |
| 6 暗褐色土 10YR3/4 |
| 7 褐色土 10YR4/4 (LV粒少量, 2mm大炭化物微量) |



84号土坑

84号土坑堆積土

- | |
|----------------------------|
| 1 黒褐色土 10YR3/2 (5mm大炭化物微量) |
| 2 褐色土 10YR4/4 |
| 3 暗褐色土 10YR3/4 |
| 4 褐色土 10YR4/6 |
| 5 黄褐色砂質土 10YR5/8 (LV粒多量) |
| 6 黄褐色土 10YR5/6 (LV粒多量) |
| 7 褐色土 10YR4/6 |
| 8 黄褐色砂質土 10YR5/6 (LV粒多量) |
| 9 紅・黄褐色砂質土 10YR5/4 (LV粒多量) |
| 10 暗褐色土 10YR3/4 |

F066
+ S1-E2

F097
+ S1-E4

0 1m
(1/30)

図21 83~85号土坑

ている。堆積土は7層に分けられる。ℓ2～5については、周壁の崩落に起因するLⅣの塊を含んでいることから、自然堆積と考えている。ℓ6についてはいわゆるフラスコ状土坑の堆積土に見られる中央が高い小山状の堆積状況が認められる。

遺構内堆積土からは1点の深鉢形土器片が出土し、図27に示した。図27-10は、口縁部に「J」字状の隆帯が垂下し、口縁部下端の横位の隆帯下には斜行縄文が施されている。

本土坑は、断面形状がいわゆる袋状をなすことから貯蔵穴と考えている。時期は、出土遺物から縄文時代後期前葉と考えている。(阿部)

86号土坑 SK86 (図22・26・27, 写真13)

本土坑は段丘北側調査区のF097グリッドに位置している。周囲1m前後にSK81・88・89の3基が隣接する。本土坑の上部は擾乱によって壊されていたため、検出面はLⅣ中層である。

平面形は不整楕円形で、規模は長軸206cm、短軸184cm、検出面からの深さは39cmを測る。周壁はほぼ垂直な角度で立ち上がっている。遺構内堆積土は4層に分けられる。ℓ2～4層中には周壁の崩落に起因するLⅣ粒を含んでいることから、自然堆積土と考えている。黄褐色を呈するℓ1については、層中から深鉢形土器の底部片が底を下にして出土(図22右上A-A')し、その出土位置が本土坑のほぼ中央に位置したことから、人為的に土器を埋めた可能性も考えている

遺構内堆積土からは深鉢の底部片が出土し、図27-6に示した。

本土坑は、規模・形態から貯蔵穴と考えている。時期は出土遺物から縄文時代後期と考えている。

87号土坑 SK87 (図20・27, 写真12)

本土坑は段丘北側調査区のF097グリッドに位置している。北側10cm前後にSK80が隣接している。検出面はLⅣ上面である。

平面形は不整円形である。規模は直径121cm、検出面からの深さは50cmである。周壁は急な角度で立ち上がっている。遺構内堆積土は7層に分けられる。壁際からの流れ込みの様相が認められることから自然堆積土と考えている。

遺構内堆積土からは1点の深鉢の口縁部片が出土し、図27-4に示した。

本遺構は不整円形の土坑で、その機能を特定することは難しい。時期については出土遺物が少なく判断し得ないが縄文時代後期と考えている。

88号土坑 SK88 (図22・27, 写真13)

本土坑は段丘北側調査区のF097グリッドに位置している。東・北側2m前後にSK80・86が隣接する。

平面形は上端の北・西部が擾乱により壊されているが、不整楕円形であったものと考えている。遺存部分の規模は長軸103cm以上、短軸72cm以上、検出面からの深さは31cmを測る。周壁は緩やか

な角度で立ち上がっている。遺構内堆積土は3層に分けられる。レンズ状の堆積状況が観察できることから、自然堆積土と判断している。

遺構内堆積土からは2点の縄文土器片が出土し、そのうちの1点を図27に示した。図27-5は器面に列点文を施した深鉢胴片である。

本遺構は不整楕円形の土坑であるが、形態等に特徴が見られないことから、その性格は不明である。時期は出土遺物から縄文時代後期と考えている。

89号土坑 S K89 (図22・27, 写真13)

本土坑は段丘北側調査区のF096・F097グリッドに位置している。北側1m前後にS K70・73・72・82の4基が位置する。検出面はLⅣ上面である。

平面形は不整楕円形である。規模は上端で長軸160cm, 短軸142cm, 底面で長軸140cm, 短軸136cm, 検出面からの深さは89cmを測る。周壁はオーバーハングして立ち上がっている。遺構内堆積土は11層に分けられる。ℓ5~11については周壁の崩落に起因するLⅣ粒または塊を含んでいることから、自然堆積と考えている。

遺構内堆積土からは6点の縄文土器片が出土し、そのうち1点を図27に示した。図27-7は器面に斜行縄文を施した深鉢胴片である。

本土坑は、断面形状がいわゆる袋状をなすことから貯蔵穴と考えている。時期は出土遺物から縄文時代後期と考えている。

90号土坑 S K90 (図22, 写真13)

本土坑は段丘北側調査区のG097グリッドに位置している。北東側1m前後にはS K91が隣接する。検出面はLⅣ上面である。

平面形は不整円形である。規模は直径約151cm, 底面で直径約140cm, 検出面からの深さは50cmを測る。周壁はわずかにオーバーハングして立ち上がっている。遺構内堆積土は6層に分けられる。底面付近のℓ6層中には炭化物が含まれていた。ℓ2~5については周壁の崩落に起因するLⅣ粒または塊を含んでいることから、自然堆積と考えている。

本土坑は、規模・形態の特徴から貯蔵穴と考えている。時期は出土遺物がなく判断し得ないが、縄文時代と考えている。

91号土坑 S K91 (図23, 写真13)

本土坑は段丘北側調査区のG097グリッドに位置している。西側1m前後にはS K90が隣接する。検出面はLⅣ上面である。

平面形は円形で、規模は直径約123cm, 検出面からの深さは41cmを測る。周壁はわずかにオーバーハングして立ち上がっている。遺構内堆積土は5層に分けられる。ℓ1~4には周壁の崩落に起

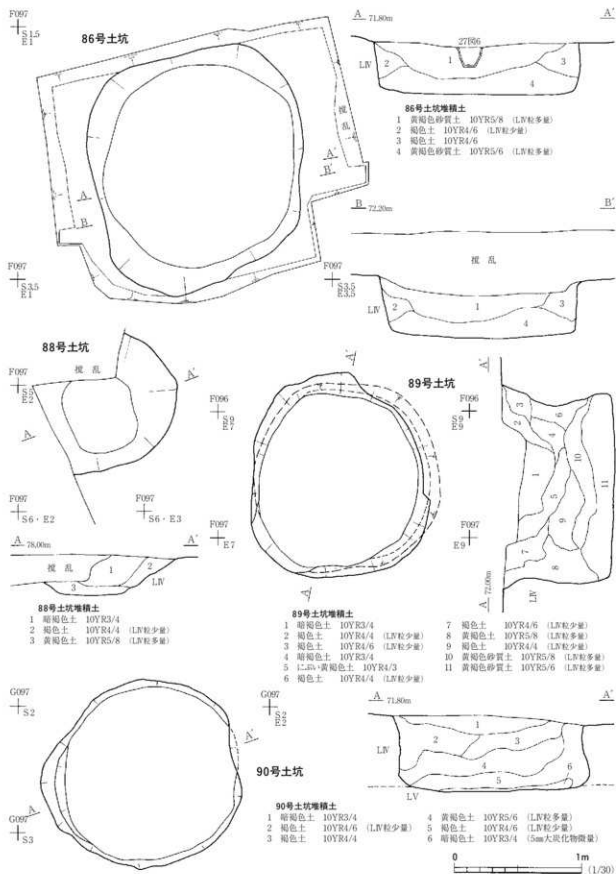


圖22 86·88~90号土坑

因するLⅣ粒または塊を含んでいることから、自然堆積と考えている。ℓ5についてはいわゆるフラスコ状土坑の堆積土に見られる中央が高い小山状の堆積状況が認められる。

本土坑は断面形状がいわゆる袋状をなすことから貯蔵穴と考えている。時期は出土遺物がなく判断し得ないが、縄文時代と考えている。

92号土坑 S K 92 (図23, 写真14)

本土坑は段丘北側調査区のG096グリッドに位置している。東西側2m前後にS K 72・102が隣接している。検出面はLⅣ上面である。

平面形は不整形円で、規模は上端で直径約135cm、底面直径約130cm、検出面からの深さは72cmを測る。周壁はオーバーハングして立ち上がっている。遺構内堆積土は6層に分けられる。ℓ3～6には周壁の崩落に起因するLⅣ粒または塊を含んでいることから、自然堆積と考えている。

本土坑は断面形状がいわゆる袋状をなすことから貯蔵穴と考えている。時期は出土遺物から縄文時代と考えている。

93号土坑 S K 93 (図23, 写真14)

本土坑は段丘北側調査区のG096グリッドに位置している。北側2m前後にはS K 92が位置している。検出面はLⅣ上面である。

平面形は南東部が壊されているが、隅丸方形であったと思われる。規模は遺存した上端で長軸134cm、短軸130cm以上、検出面からの深さは39cmを測る。周壁は、南東・北西隅においてオーバーハングするが、ほぼ垂直に近い角度で立ち上がっている。遺構内堆積土は5層に分けられる。堆積状況は壁際からの流れ込みの様相が観察されることから、自然堆積土と判断した。

本土坑は規模・形態の特徴から貯蔵穴と考えられる。時期は出土遺物がなく判断し得ないが縄文時代と考えている。

94号土坑 S K 94 (図23・27, 写真14)

本土坑は段丘北側調査区の南側に立地し、G098グリッドに位置する。南1m前後にS K 95がある。検出面はLⅣ上面である。平面形は北東部が壊されているが、不整形円形を呈したと思われる。規模は長軸153cm以上、短軸142cm、検出面からの深さは46cmを測る。底面は礫層であるLⅤを若干掘りこんでおり、中央に向かってわずかに傾斜しているがおおむね平坦である。周壁は垂直に近い角度で立ち上がっている。遺構内堆積土は6層に分けられる。堆積状況は壁際からの流れ込みの様相が観察されることから、自然堆積土と判断した。

本土坑からは17点の縄文土器片が出土し、そのうち2点を図27に示した。図27-8・9はいずれも口縁部下端に横位の隆帯が巡る深鉢形土器の口縁部片である。

本土坑は、規模・形態の特徴から貯蔵穴で、出土遺物から縄文時代後期前葉と考えている。

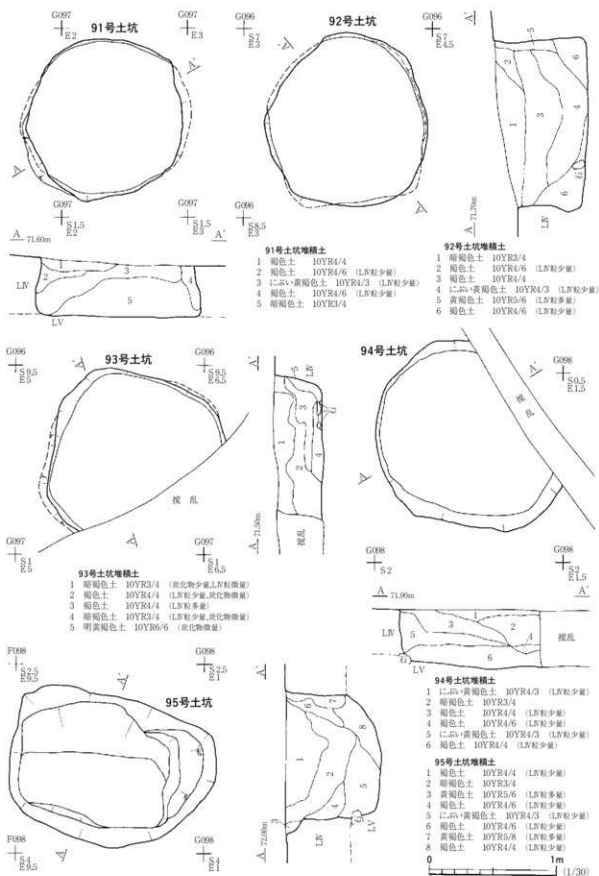


图23 91~95号土坑

95号土坑 SK95 (図23, 写真14)

本土坑は段丘北側調査区の南側に立地し、F098・G098グリッドに位置している。北側1m前後にSK94、東にSK99がある。検出面はLⅣ上面である。

平面形は不整楕円形である。規模は上端で長軸163cm、短軸116cm、検出面からの深さは76cmを測る。周壁は、ほぼ垂直に近い角度で立ち上がっている。遺構内堆積土は8層に分けられる。堆積状況は壁際からの流れ込みの様相が観察されることから、自然堆積土と判断した。

本遺構は不整楕円形の土坑であるが、形態等に特徴が見られないことから性格は不明である。時期は出土遺物がなく不明である。

96号土坑 SK96 (図24, 写真14)

本土坑は段丘北側調査区の南側に立地し、F099グリッドに位置している。北西部50cm前後にSK97が隣接する。検出面はLⅣ上面である。

平面形は不整楕円形で、長軸方向はN約20°Eである。規模は長軸244cm、短軸120cm、検出面からの深さは47cmを測る。周壁は緩やかな角度で立ち上がる。遺構内堆積土は3層に分けられる。堆積状況は壁際からの流れ込みの様相が観察されることから、自然堆積土と判断した。

本遺構は不整楕円形の土坑であるが、形態等に特徴が見られないことから性格は不明である。時期は出土遺物がなく不明である。

97号土坑 SK97 (図24・27, 写真15・16)

本土坑は段丘北側調査区の南側に立地し、F099グリッドに位置している。南東50cm前後にSK96が隣接している。検出面はLⅣ上面である。平面形は不整形で、規模は直径約110cm、検出面からの深さは47cmを測る。底面はほぼ平坦で、周壁はほぼ垂直に近い角度で立ち上がる。遺構内堆積土は2層に分けられる。①は黒褐色土が堆積し、人頭大の花崗岩を8個含んでいた。堆積状況は壁際からの流れ込みの様相が観察されることから、自然堆積土と判断した。

本土坑からは1点の縄文土器片が出土し、図27に示した。図27-11は連続する爪形文様を施した深鉢の口縁部片である。

本土坑は規模・形態の特徴から貯蔵穴と考えられる。時期は、図27-11が浮島式土器と考えられることから縄文時代前期後半と考えている。

98号土坑 SK98 (図24, 写真14)

本土坑は段丘北側調査区の南側に立地し、F099グリッドに位置している。南西4m前後にSK96・97がある。検出面はLⅣ上面である。

平面形は不整楕円形である。規模は長軸203cm、短軸84cm、検出面からの深さは35cmを測る。周

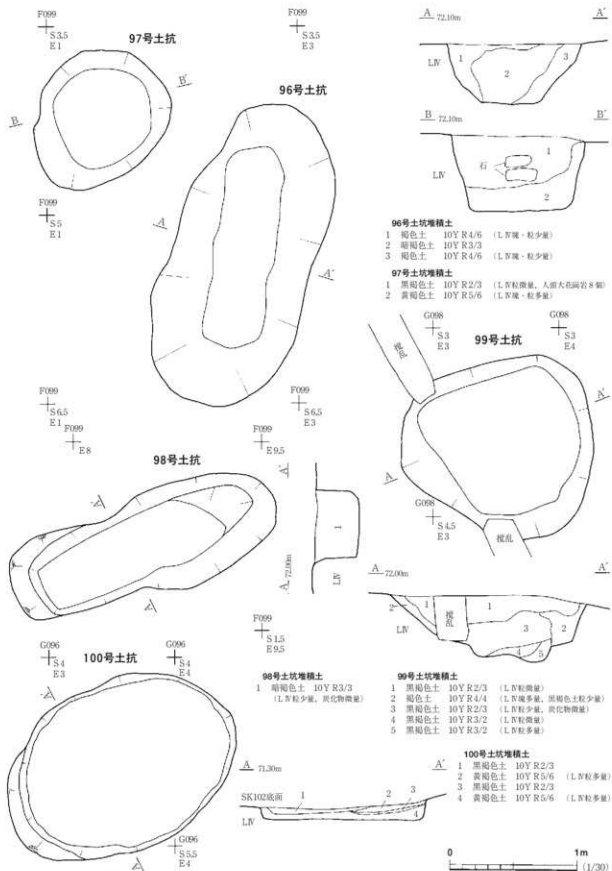


图24 96~100号土坑

壁はほぼ垂直近い角度で立ち上がっている。遺構内堆積土は単一層で、特に人為堆積を示すような知見は得られなかった。

本遺構は不整楕円形の土坑であるが、形態が落し穴状土坑のようであるが、規模が落し穴状土坑としては浅いため、その性格は判断し得ない。時期は出土遺物がなく不明である。

99号土坑 S K 99 (図24・27, 写真15)

本土坑はG098グリッドに位置し、北斜面上の平坦面に立地している。北西約4mの所にS K 94・95がある。検出面はL V上面である。平面形は不整楕円形で、規模は長軸153cm、短軸144cm、検出面からの深さは52cmを測る。周壁は東・北側では急な角度で、西・南側では緩やかな角度で立ち上がっている。遺構内堆積土は5層に分けられる。堆積状況は壁際からの流れ込みの様相が観察されることから自然堆積土と判断した。

本土坑底面からは1点の縄文土器片が出土し、図27に示した。図27—12は外面に斜行縄文を施した深鉢胴部片である。

本遺構は不整楕円形の土坑であるが、形態等に特徴が見られないため、その性格は判断し得ない。時期は出土遺物から縄文時代前期と考えている。

100号土坑 S K 100 (図24, 写真15)

本土坑は段丘北側調査区のG096グリッドに位置している。S K 102と重複しており、本土坑の方が古い。検出面はS K 102底面である。

平面形は不整楕円形である。規模は上端で長軸182cm、短軸133cm、検出面からの深さは11cmを測る。周壁の立ち上がりは急である。遺構内堆積土は4層に分けられる。①・②より上層はS K 102の掘削時に失われたと考えている。①～③については、黄褐色土と黒褐色土が交互に堆積していることからS K 102の底面を整えた際の土と考えられ、人為堆積と判断している。

本遺構は不整楕円形の土坑であったが、S K 102の掘削により壊され、形態等の特徴が不明である。時期はS K 102との重複関係から縄文時代前期と考えている。

101号土坑 S K 101 (図25, 写真15)

本土坑は段丘北側調査区の東側に立地し、H096・I096グリッドに位置している。検出面はL V上面である。平面形は不整楕円形である。規模は長軸102cm、短軸83cm、検出面からの深さは13cmを測る。周壁は急な角度で立ち上がっている。遺構内堆積土は単一層で、特に人為堆積を示すような知見は得られなかった。

本遺構は不整楕円形の土坑であるが、形態等に特徴が見られないため、その性格は判断し得ない。時期は出土遺物がなく不明である。

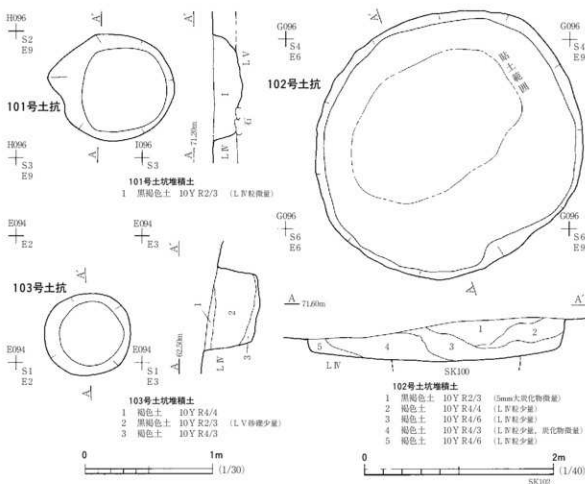


図25 101～103号土坑

102号土坑 SK102 (図25・27, 写真15)

本土坑は段丘北側調査区のG096グリッドに位置している。SK100と重複し、本土坑の方が新しい。検出面はLV上面である。

平面形は楕円形で、長軸方位はN約50°Eである。規模は上端で長軸295cm、短軸267cm、検出面からの深さは41cmを測る。底面はほぼ平坦である。底面北寄りに楕円形状の範囲に客土を用いて底面を整えられた痕跡が確認された。この貼土範囲については、図25右上に一点鎖線で外縁を示した。本土坑はSK100を壊して掘り込んでいるため、本土坑の掘削時にSK100の上層をわずかに抉ったと思われる、抉れた部位に土を埋め(図24下段SK100土層断面A-A')平らに整えたと考えている。周壁は急な角度で立ち上がっている。遺構内堆積土は5層に分けられる。堆積状況は壁際からの流れ込みの様相が観察されることから、自然堆積土と判断した。

本土坑からは2点の深鉢形土器片が出土し、図27に示した。図27-13はループ文で施文した深鉢口縁部片で、同図14は縄側面の押圧で渦巻き文様を施文している。

本土坑は、規模が大きく住居跡のように見えるが、底面に炉や小穴が認められないなど形態等に特徴がなく、その性格は判断し得ない。時期は出土物から縄文時代前期前葉と考えている。

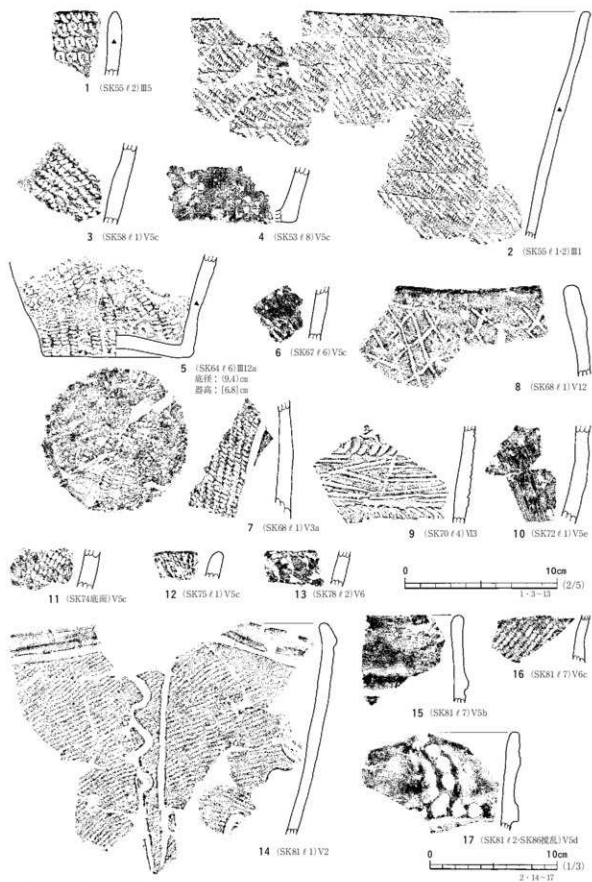


図26 土坑出土遺物(1)

103号土坑 SK103 (図25, 写真15)

本土坑は段丘北側調査区の斜面裾に立地し、E094グリッドに位置している。北約3mの所にS I 36がある。検出面はL IV上面である。平面形は円形で、規模は直径約68cm、検出面からの深さは40cmを測る。周壁は急な角度で立ち上がっている。遺構内堆積土は3層に分けられる。堆積状況は斜面上方からの流れ込みの様相が観察されることから、自然堆積土と判断した。

本土坑は出土遺物が無く、形態に特徴がないため、性格・時期は不明である。

(高林)

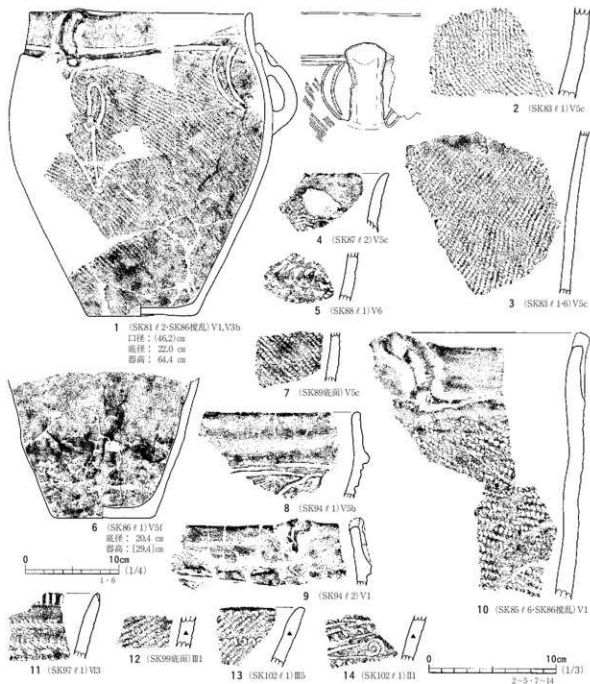


図27 土坑出土遺物 (2)

第4節 木炭窯跡

上平A遺跡3次調査では、2基の木炭窯跡を確認した。いずれも段丘北側調査区の斜面肩部に立地している。過年度の調査数を加えると合計3基を数えるが、1次調査区で確認したSC1は出土した木炭の年代測定の結果13世紀後半との値が示されている。木炭窯跡の番号は、1次調査を踏襲して、2番から付けた。

2・3号木炭窯跡 SC2・3 (図28)

2基の木炭窯跡は、段丘斜面肩部に立地し、F・G095グリッドの間に東西7mほどの間隔を空けて位置する。東側の3号木炭窯跡については、平成16年度に実施した試掘調査の際に15トレンチで検出された。

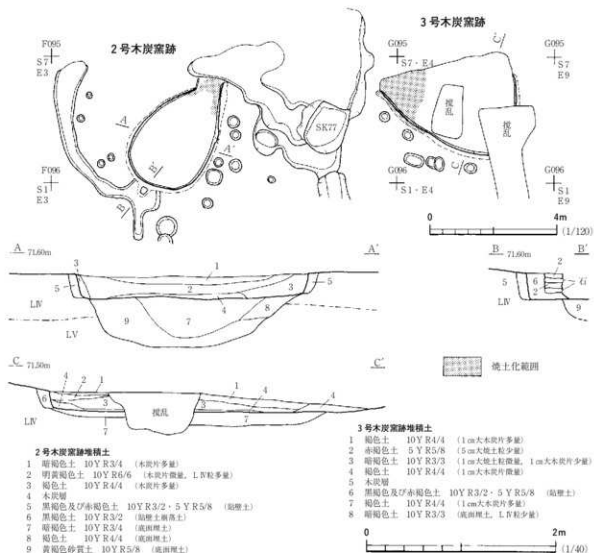


図28 2・3号木炭窯跡

平面形は2号木炭窯跡ではイチジクの果実状を呈し、北側が壊れている3号木炭窯跡でも同形状であったと考えている。2号木炭窯跡では、長軸線上の南東縁に煙出部が付設されている。規模は、2号木炭窯跡において長軸4m、短軸2.4m、長軸方位はN約30°E、検出面からの深さは最大30cmである。3号木炭窯跡においては遺存した部分で長軸4.2m、短軸2.6m以上、長軸方位はN約85°W、検出面からの深さは最大20cmである。炭化室の長さは、焼土面の境から奥壁までの距離として、2号木炭窯では約3.4m、3号木炭窯跡では約2.8mを測る。堆積土は、窯跡構築後に堆積した堆積土と、窯跡を構築した後に再堆積した土の2つに大別できる。2号木炭窯跡の堆積土は9層に分けられ、そのうち⑤・⑦～⑨は、窯跡の底面または壁を成形した構築土である。3号木炭窯跡の堆積土は8層に分けられ、そのうち⑥・⑦は窯跡の底面または壁を成形した構築土である。2・3号木炭窯の周壁はいずれも急な角度で立ち上がっている。2号木炭窯跡の南東壁の中央には底面から8cmほど隙間を空け、南側に煙出し部が続いている。

2基の木炭窯跡の周囲には、周壁を囲むように小穴が確認できることから、窯跡を覆う上屋が設けられていたと考えられる。2号木炭窯跡では、周囲から窯跡のほうへと流れてくる雨水を回避するために、煙出し部に接続して「し」字状に浅い溝跡が巡っている。また、2号木炭窯跡の北東側で砂礫層が溝状や土坑（SK77）状に掘り込まれた箇所が確認できる。これらについては、2基の窯跡構築の際に、構築土の混和材として必要な砂を採取した際のものと考えている。

2基の木炭窯跡は、いずれも同程度の規模で、半地下式の木炭窯で、いわゆる大竹式木炭窯と呼ばれるものである。2基の時期は、出土遺物が無く確定できないが、2号木炭窯跡については地元（大字大川原地区）の住民によると、昭和10（1935）年前後に使用されていたことが確認できている。3号木炭窯跡については、昭和10年前後に存在を知られていないことから、それよりも以前に構築されたと考えている。

（阿 部）

第5節 遺物包含層

上平A遺跡の3次調査では、南北2ヶ所の調査区において遺物包含層を確認した。段丘南側調査区では、平成16年度の2次調査区に隣接したS I 32・33の立地する周辺において遺物包含層が形成されていた。一方、段丘北側調査区においては、北斜面裾部において遺物包含層を確認した。調査の段階でL I～Vの5層に区分し調査を進めた。これらの層については第2章第1節で報告した。

また、遺構外出土遺物については、10mグリッドを4分割した一辺5mの方眼ごとに取り上げた。この4分割した方眼は、北西から時計回りに「1～4」と番号を付し、例えば、D8グリッドの4番目のマスから出土した場合、「D8-4」と表示し、併せて遺物の出土層位も付した。

以下では、包含層から出土した遺物について報告するが、表土や掘乱穴等の中から出土した遺物についても本節で扱う。

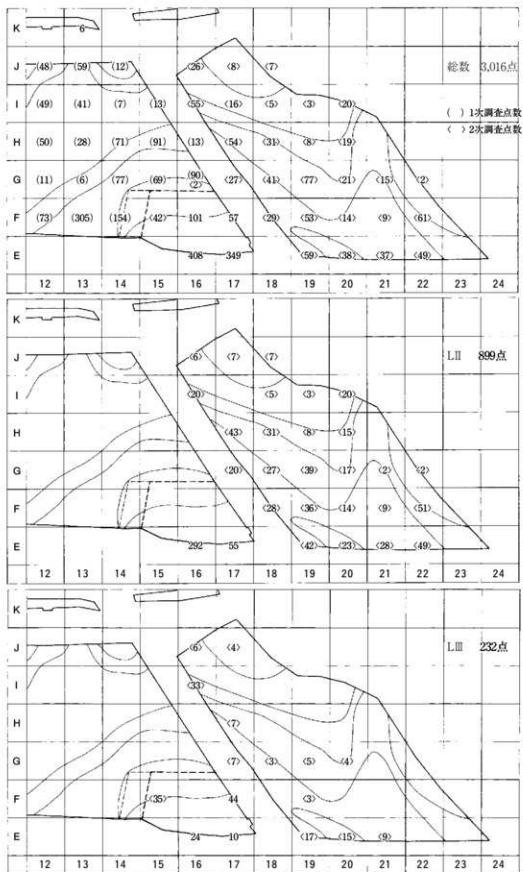


図29 グリッド別土器出土点数（1）

遺物の出土状態

(図29・30)

上平A遺跡の3次調査で出土した土器は、遺物包含層の確認された場所によって主体をなす土器に違いが見られる。段丘南側調査区では、東西に走る町道北縁に沿って、圃場整備等の掘削を免れ遺物包含層が残存している。特に、S I 32・33の周辺では掘削がL II上層で止まったお陰で、比較的多くの遺物を確認できた。3次調査で出土した土器点数は921点である。この中で主体を占めるのは1・2次調査と同様にII・III群とした縄文時代前期前半のものである。今回の調査ではII・III群土器以外の土器はほとんど含まれていなかった。今回の段丘南側で確認したII・III群土器の堆積層ごとの出土量は、L IIが347点、L IIIは84点であった。図29には1次調査時からの土器出土量の平面分布図を示した。西から南東に向かって次第に出土量が減少する傾向が見て取れる。

段丘北側調査区では、北側法面裾において遺物包含層が形成されている。ここの堆積土の特徴は北側に隣接する上平B遺跡の堆積土とはほぼ一致している。ここから出土した土器点数は合

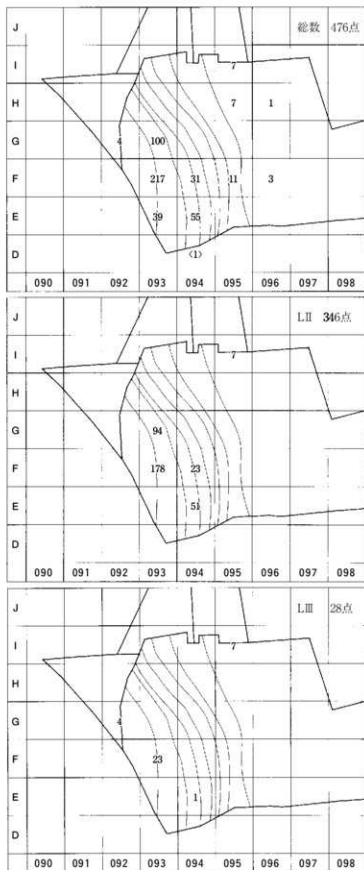


図30 グリッド別土器出土点数(2)

計476点である。斜面裾部において主体を占めるのはV群土器とした縄文時代後期前半のもので、段丘南側調査区で確認できたⅡ～Ⅳ群土器はほとんど含まれていない。図30には図29と同様に土器出土量の平面分布を示した。これを見ると、裾部でも比較的傾斜が緩やかになった調査区北端付近に分布の中心がある。遺物の集中したグリッド内は、S I 35・36が立地しており、黒褐色土層(LⅢb)上での住居跡の認識が難しかったため、もともと遺構内にあった遺物を包含層の遺物として取り上げてしまったことが影響している可能性が高い。なお、包含層の掘り込みに際しては主として唐鍬を使用したため、石鍬等小型の遺物については、サンプリングエラーが生じた可能性がある。

遺 物 (図31～34, 写真16)

Ⅱ群土器 Ⅱ群土器は1類で、縄圧痕と刺突文を施している。4類には連続爪形文または刺突による帯状文で幾何学的な文様を表すもの(図31-2～4・6)と、沈線間に連続爪形文を施すもの(図31-5)がある。図31-7は6類で、並行沈線文と沈線文が施された後に米粒ほどの貼粒文が加えられている。図31-8は8類に比定され、上下に伸びたコンパス文を施している。10類は図31-9～28、図32-25・26で、図31-14はループ文に円形刺突文を施し、同図11・20・22・26はループ文の間に幾何学的な無文帯を配し、同図28は口縁端部にスリットを配している。

Ⅲ群土器 Ⅲ群土器は地文のみを施すものである。図31-36～38は1類である。図31-29～35、図32-1～6は2類で、図31-35には綾絡文が施されている。綾絡文については上平A遺跡の平成14年度調査報告書で2類に含めていることから踏襲した。図32-7～15、図34-2は3類で、非結束の原体による羽状縄文が施文され、図32-9・16～24にはループ文が施されている。図34-2は段丘北側調査区から1点だけ出土したもので、胎土中に繊維を含まないもので、縄文時代前期中葉ごろの所産と考えられる。図32-27～31は7類で組紐文を施し、図32-32は10類で熱糸文が施されている。図32-34・35は底部で、底面にも文様が施されている。

Ⅳ群土器 Ⅳ群土器は1点だけ図示した。図32-33は1類で、波頂部に施文された渦巻文から大木8b式と考えられる。

V群土器 図33-1～5は1類で、同図1・2は隆帯による「S」または「ノ」字状の口縁部突起で、このうち同図1は両耳壺の口縁部片である。同図3・4は無文地に沈線で文様を描いている。

3類のうち図33-6～12はb種に比定され、同図10は図33-3と同一個体で無文地に沈線で文様を描き描いている。同図11は幅の狭い無文帯で「ノ」字状の文様を胴部に配している。

5類のうち図33-13～19、図34-3はe種に比定され、胴部に条線文を施している。同図13・16・17は同一個体と考えている。

図34-1は両耳壺の把手で、胎土の様子から図33-1と同一個体と考えている。

石 器 図34-4～11に示した8点が包含層中から出土した石器のすべてである。同図4・6は石鍬片で、同図7は素材の厚みを取りとりきれいな石鍬の未成品である。同図5は剥片で、同図8は小型の石筭片である。同図9～11は磨石・凹石で、9の表面中央は窪んでいる。10・11

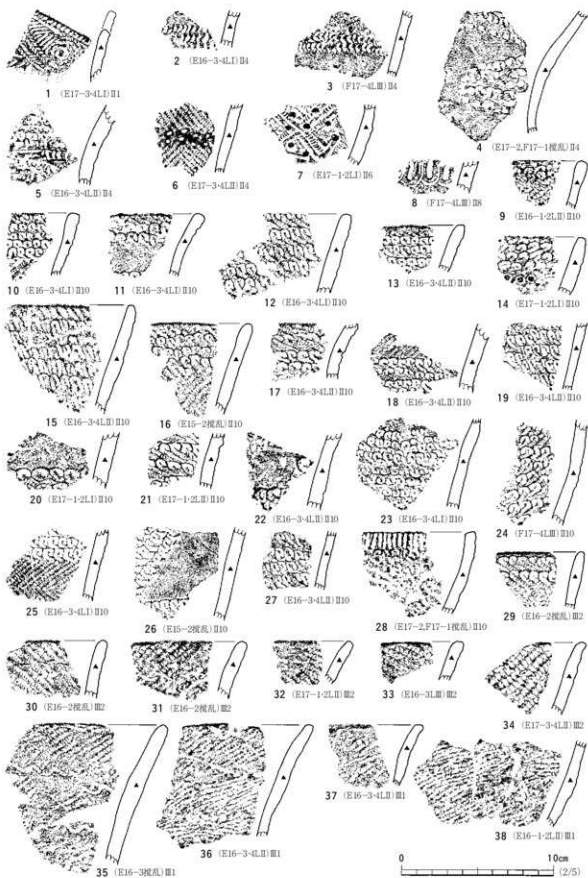


図31 遺物包含層出土遺物(1)

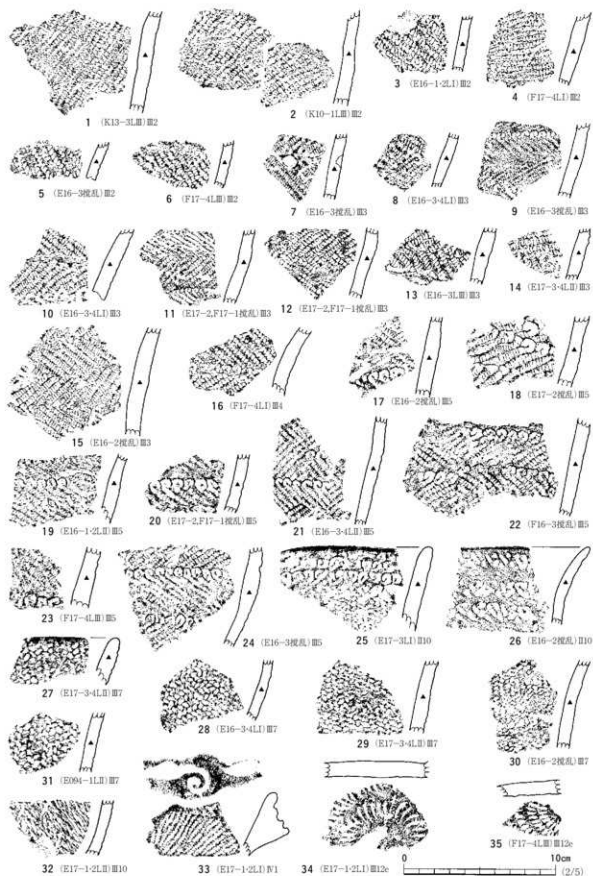


図32 遺物包含層出土遺物(2)



图33 遺物包含層出土遺物(3)

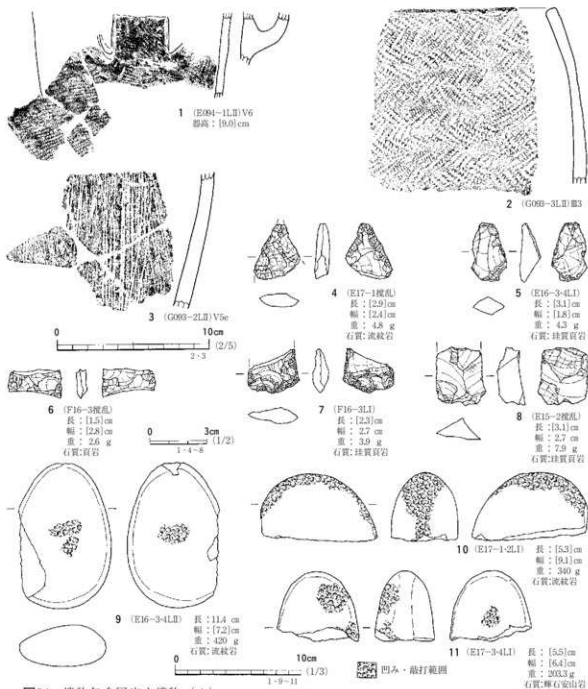


図34 遺物包含層出土遺物(4)

は敲打により表皮が剥けている。

参考文献

- 福島県教育委員会 1997 『福島県内遺跡分布調査報告3』, 2003 『福島県内遺跡分布調査報告9』
 2005 『福島県内遺跡分布調査報告11』
 福島県農地林務部 1956 『福島県製炭技術改良普及資料 大竹式製炭法』
 松本 茂ほか 2005 『常磐自動車道遺跡調査報告41』 福島県教育委員会
 「まとめ」については「第4編第3章」中で後述した。



1 調査区全景 (1)

a 調査前調査区近景(北から)
b 調査区近景(南東から)



2 調査区全景（2）

a 調査区透景(北上空から) b 調査区透景(北西上空から)
c 調査区透景(北東から)



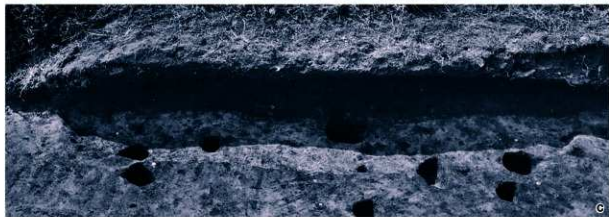
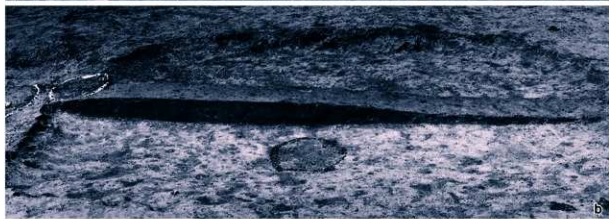
3 調査区全景 (3), 基本土層

a 調査区全景(北東上空から)
 b 基本土層(西から)
 c 作業風景(南西から) d 作業風景(東から)



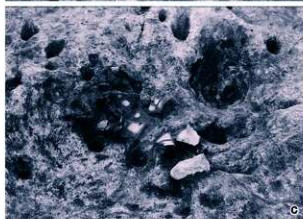
4 調査区全景(4)

a 段丘南側調査区透景(東上空から、平成14・16年度調査区合成)
b 段丘北側調査区透景(東上空から)



5 29・32号住居跡

- a 29号住居跡全景(南から)
- b 29号住居跡土層(東から)
- c 32号住居跡全景(東から)



6 33号住居跡

a 全景(南西から)
b 土層(南から)
c 遺物出土状況(南西から) d 掘出状況(北から)



7 35・36号住居跡

a 35号住居跡全景(東から)
b 36号住居跡全景(南東から)



8 35・36号住居跡，土坑群

- a 35号住居跡の跡検出状況(南から) b 35号住居跡の跡土層(東から)
c 36号住居跡の跡検出状況(東から) d 36号住居跡の跡土層(東から)
e 土坑群全景(北上空から)